

2016年度事業の概要

1 調査と研究	30	国が実施する事業等についての調査・協力	52
飛鳥藤原京の発掘調査	30	●平城宮・京跡の整備	52
平城京の発掘調査	30	●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査	52
企画調整部の研究活動	31	●キトラ古墳に関する調査研究	53
文化遺産部の研究活動	32	現地説明会・見学会	53
●歴史研究室の調査と研究	32	2 研修・指導と教育	54
●建造物研究室の調査と研究	33	文化財担当者研修と指導	54
●景観研究室の調査と研究	33	京都大学（大学院）との連携教育	54
●遺跡整備研究室の調査と研究	33	奈良女子大学（大学院）との連携教育	54
埋蔵文化財センターの研究活動	34	奈良大学への教育協力	54
●保存修復科学研究室の調査と研究	34	3 展示と公開	56
●環境考古学研究室の調査と研究	34	飛鳥資料館の展示	56
●年代学研究室の調査と研究	35	平城宮跡資料館の展示	56
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究	35	解説ボランティア事業	57
国際学術交流	36	図書資料・データベースの公開	57
●中国社会科学院考古研究所との共同研究	36	4 その他	58
●中国河南省文物考古研究院との共同研究	36	刊行物	58
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究	36	人事異動	63
●韓国国立文化財研究所との共同研究	37	予算等	64
●西アジア諸国の文化財保存協力事業	37	職員一覧	65
●カンボジアにおける共同研究	37	客員研究員一覧	66
●ミャンマー考古・国立博物館局との 技術移転・人材育成事業	37		
●セインズベリー日本藝術研究所との研究交流	38		
●中央研究院歴史語言研究所との研究交流	38		
海外からの主要訪問者一覧	39		
海外からの招へい者一覧	40		
奈文研研究者の海外渡航一覧	41		
公開講演会	43		
第8回東京講演会（一橋講堂）	43		
第118回公開講演会	44		
第119回公開講演会	44		
研究集会	44		
科学研究費等	45		
学会・研究会等の活動	51		

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2016年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で4件、藤原京跡で3件、飛鳥地域で3件である。また、立会調査は13件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮朝堂院の調査（第189次）は、朝堂院朝庭における儀式遺構の確認を主要な目的とし、大極殿院南門のすぐ南側の960㎡を調査の対象とした。調査期間は2016年6月20日から12月1日である。調査の結果、2008年度の第153次調査でみつかった柱穴4基とあわせ、合計7基の大型柱穴を検出した。これらは宮中軸線上に位置する1基が鳥形幢にあたり、その東に日像と青龍・朱雀幡を三角形に配し、西には月像と玄武・白虎幡を東とは逆向きの三角形に配したものと推定でき、大宝元年正月に「正門」に樹立された幢幡遺構であると考えられるようになった。さらに、これらの南側では16基からなる旗竿遺構も確認し、国家的な儀式の整備過程を考える上で、大きな成果となった。

藤原宮大極殿院の調査（第190次）は、大極殿院東面回廊と東門の南端（480㎡）を調査の対象とした。調査期間は2016年10月4日から2017年2月6日である。調査の結果、東門南端の礎石据付穴と、東面回廊の礎石据付穴や抜取穴、雨落溝や基壇外装の抜取溝等を検出した。その結果、東門の規模は桁行7間・梁行2間と確認できた。東面南回廊は13間であり、これに東門との取付部として2間が設けられる構造となることがあきらかとなった。

このほか、藤原宮東南官衙地区では、道路拡幅にともなう発掘調査（第188-7次）において官衙ブロックを区画する南北溝と、建物、塀等の柱穴を検出し、これまでに調査が進んでいない東南官衙地区の様相解明の手がかりを得た。そのほか、水路改修にともなう藤原宮外周帯の調査（第191次）では、東西溝2条を確認している。

藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡の発掘調査（第189次）は、ポリテクセンター奈良の本館建替にともなう発掘調査である。2015年11月25日より調査を開始し、2016年10月5日に完了した。調査面積は2,019㎡である。調査の結果、藤原京の条坊関連遺構として西二坊大路を検出した。これより東側の右京九条二坊西北坪では、大路の東側溝へ続く坪内道路の道路側溝2条を検出し、坪内を分割して使用されていたこと

が判明した。西側の九条三坊東北坪では、南北塀4条、掘立柱建物7棟等を検出した。うち3棟は大型掘立柱建物で、坪内に計画的に配置されており、一町占地の大規模な施設の存在がうかがわれる。また、弥生時代後期末の円形周溝墓を検出した。その規模は直径19.0mで、撥形にひらく陸橋を墳丘の南側に備えている。陸橋を含めた全長は約25.5mにおよび、幅約6mの周溝がめぐる。周溝から出土した土器によれば、この円形周溝墓は前方後円墳の起源とされる纏向石塚古墳よりも古い。これは大和盆地における前方後円墳の成立を考える上で重要な成果である。このほか、下層確認調査では縄文時代後期から晩期の土器・石器が多数出土した。

飛鳥地域では、特別史跡山田寺跡で法面改修工事にとともなう発掘調査をおこない、北面大垣の柱穴および北面大垣にとともなう石組溝や瓦組暗渠を検出する等の成果が上がった（第188-4次・第188-11次）。このほか、奥山廃寺（奥山久米寺）で小規模な調査をおこなった。

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2016年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で3件、平城京跡で17件である。また、立会調査は54件である。以下、主要な発掘調査について概要を記す。

平城宮では、東院地区の発掘調査を実施した（第584次調査）。第481次調査区の東側、第503次調査区の北側に重複させて東西29m、南北38mの調査区を設定し、奈良時代の複数時期にわたる掘立柱建物、掘立柱塀、石組溝、石列等の遺構を検出した。詳細は『紀要2018』で報告予定である。

平城京域では、平城宮周辺と複数の寺院で発掘調査を実施している。

国土交通省による史跡朱雀大路跡等の整備にともない、2016年度は朱雀大路・二条大路、右京三条一坊二坪の発掘調査を実施した（第566次・第576次・第577次・第578次調査）。第566次調査では、朱雀門前における朱雀大路西側溝と二条大路南側溝の規模、ならびに西一坊坊間東小路の位置と規模をあきらかにすることを目的として、東西2ヵ所の調査区を設定した。その結果、朱雀大路西側溝、二条大路南側溝、西一坊坊間東小路西側溝を検出し、平城宮の正門である朱雀門前の様相があきらかになった。二条大路南側溝と朱雀大路西側溝の合流部分を検出し、朱雀大路西側

溝が二条大路を横断することをあらためて確認した。また、西一坊坊間東小路西側溝のほか、新たに二条大路を南北に横断する溝を検出した。二条大路南側溝と西一坊坊間東小路西側溝の合流地点付近では西岸に沿って埋土の上層に大量の瓦が出土しており、右京三条一坊八坪を遮蔽する築地塀の存在が推測される。なお、西一坊坊間東小路東側溝は想定された位置に明瞭には確認されなかった。

第576次調査では、第566次調査で検出した二条大路を横断する南北溝の左京側の対称位置に調査区を設定した。その結果、第566次調査の対称地に南北溝は確認できず、宮内から南面大垣を貫流する中央大溝SD3715は二条大路を横断しないことが判明した。

第577次調査では、右京三条一坊二坪における朱雀大路西側溝や築地塀の様相をあきらかにすることを目的として、第552次調査南区の南側約40mの位置に調査区を設定した。その結果、朱雀大路西側溝や幅4.8m～5.6mの築地塀の基礎となる遺構を検出し、その規模や特徴をあきらかにした。

第578次調査では、二条大路を横断する朱雀大路西側溝にて、3ヵ所の張出遺構を検出した。張出遺構は二条大路の中軸とその南北両側約9mに位置し、計画的に配置されている。これらの遺構は、朱雀大路西側溝に架かる橋の基礎である可能性がある。

奈良文化財研究所本庁舎敷地内でおこなわれたこれまでの調査の成果を受け、本年度は一条南大路より南方の西一坊大路周辺の様相、ならびに敷地西北部の右京一条二坊四坪の様相をあきらかにすることを目的とした同敷地内の調査を実施した（第565次調査）。その結果、佐伯門西南方における一条南大路南側溝と西一坊大路西側溝は、3段階の変遷を経たことがあきらかになった。特に、第3段階には灰色砂層の堆積にともなう大路のかさ上げと東西溝SD3387の新規掘削による排水体系の再整備がおこなわれており、大規模な修繕工事がおこなわれたことがうかがえる。また、右京一条二坊四坪では秋篠川旧流路に由来する沼状堆積が確認でき、この埋め立てが平城京造営期よりも降ることがあきらかになった。いっぽう、敷地西北部に設けた調査区では小規模な柱穴を検出するにとどまり、奈良時代の遺構の展開は希薄である。平城京造営直後の四坪の土地利用は、旧流路に起因して坪の一部を利用するのみであったとみられ、その後、埋め立て・整地を経て坪全体の利用へと推移していったものと考えられる。

寺院関係では、興福寺南大門前西門守屋の発掘調査を実施した（第567次調査）。その結果、西門守屋の

建物北部の基壇外装に加え、新たに建物東南部の基壇外装と、その抜取溝を検出した。西門守屋は基壇が西側で南に折れ、東側では南辺に階段とみられる凸部をもつ等、東門守屋とほぼ対称の平面形態であることが判明した。ただし、規模には若干の差異があり、今後の検討課題である。西門守屋の創建時期については、残存する基壇外装の所見から、奈良時代前半にさかのぼる可能性が高い。

このほか東大寺東塔院跡（東大寺・奈良県立橿原考古学研究所との共同調査）や法華寺旧境内等で発掘調査を実施している。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、以上のような事業を実施し、奈良文化財研究所がおこなう研究に関わる様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修は、遺跡や遺物をはじめとする文化財の調査や、その成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を年度ごとの計画にしたがって実施している。2016年度は、専門研修15課程を実施し、延べ167名が受講した。研修受講者に対し、「今回受講した研修が『有意義だった』あるいは『役に立った』と思うか、思わない」のアンケート調査をおこなった結果、100%の者から『思う』の回答を得ている。

文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースとして、全国遺跡報告総覧の公開をおこなっており、極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・35mmスライドフィルム・建造物保存図・軒瓦拓本カード等のデジタル化を進めている。

文化財保護に資する国際協力については、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修へ

の協力事業として、(1)集団研修「遺跡（遺構・遺物）の調査と保護」（アジア太平洋諸国から15名参加）、(2)個別テーマ研修「博物館等における文化財の調査・記録・保存修復・活用」（ラオス、カンボジア、ミャンマーから6名参加）(3)フィリピンで開催された「文化遺産ワークショップ」に講師等を派遣し協力している。

諸外国との国際共同研究としては、中国の社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究院、遼寧省文物考古研究所との共同研究、韓国の国立文化財研究所との共同研究がある。1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業は、西トプ遺跡を対象にした調査と修復を実施しており、現在は北祠堂の解体・修復を進めている。このほか、文化庁受託事業によるミャンマー宗教・文化省との拠点交流事業では、ピュー文化の遺跡であるシュリクシェトラ遺跡や陶磁器の窯跡を題材に考古技術の移転を目的とした研修をおこなっている。

平城宮跡資料館では、夏期企画展として「ナント！おいしい!?平城京!!」を開催し、秋期特別展として毎年恒例となった木簡の実物展示として、「地下の正倉院展 式部省木簡の世界－役人の勤務評価と昇進－」を、冬期企画展として「発掘速報展平城2016」をおこなった。飛鳥資料館では、春期特別展「文化財を撮る－写真が遺す歴史」、夏期企画展 第7回写真コンテスト応募作品展「飛鳥の石」を開催し、秋期特別展では「祈りをこめた小塔」をおこなった。冬期企画展は「飛鳥の考古学2016 飛鳥むかしむかし 早川和子原画展」をおこなった。藤原宮跡資料室では、常設展示に加え藤原宮大極殿院出土遺物の速報展示を開催した。

写真室では、研究所内の各文化財記録写真の撮影や、写真データの保管管理をおこなっている。また、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法の開発もおこなっている。さらに近年では、各地の地方公共団体での埋蔵文化財写真の研修会等に講師として出席している。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室におけ

る調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をおこなっている。

2016年度は、仁和寺・薬師寺・唐招提寺・興福寺・東大寺や、奈良関係の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

仁和寺の調査では、御経蔵聖教第74函～第81函の調書原本校正・写真撮影を実施し、また今までの調査成果をとりまとめて『仁和寺史料 目録編〔稿〕三』を公表した。

薬師寺調査では、第8函～第10函の調書原本校正と、第26函の写真撮影を実施した。また薬師寺僧の官位昇進過程の様相を『奈良文化財研究所紀要2016』に公表した。

唐招提寺の調査においては、宝蔵に所在する聖教第10函～第12函の整理作業と、第5函の写真撮影をおこなった。

興福寺では、『興福寺典籍文書目録』の続編を公表するための調査を続け、井坊家記録仮2括～仮6括の調書を作成し、また二条家記録第1函～第7函の写真撮影を実施した。

東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第85函の調査データ入力、第56函・第76函の写真撮影等をおこなった。

法華寺所蔵の歴史資料を調査し、近世の日記の調書作成・写真撮影を実施した。また鳥取県三仏寺所蔵の歴史資料を調査し、奉納経等の整理検討・写真撮影をおこなった。

興福寺関係の個人所蔵資料について、科学研究費補助金も充当して調査を実施した。

また、奈良県からの依頼により、生駒市長福寺所蔵の文字資料を調査した。鎌倉時代の大型木札等があり、寺領を木札に書き上げて本堂に掲げていたと推定できた。その成果は、第38回木簡学会研究集会において報告した。

その他、調査協力の依頼を受けて、文化庁依頼の仁和寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2016年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を進めた。法隆寺が奈良県文化財保存事務所に委託した、昭和修理に際し、再使用が不能と判断され、法隆寺に別途保管されている部材の整理および収納に際し、当研究所が部材の実測、写真撮影等をおこない、図化をおこなった。引き続き2017年度も調査をおこなう予定である。

受託調査として、2015年度から取り組んでいる鳥取県若桜町の伝統的建造物群保存対策調査は、各伝統的建造物の詳細な調査をおこなう2次調査、水路や樹木等の環境物件、工作物調査、町並みの成立や変遷をたどる歴史調査等をおこない、保存計画案を添付して報告書を刊行した。

本年度より始まった出雲市内神社建築調査は出雲市内に所在する出雲大社や国指定文化財以外の神社建造物に関する悉皆的な調査で、この地方に特有の大社造を中心とする162件の神社本殿を現地調査した。切妻造妻入の本屋に階隠の小屋根が付く大社造やその発展形と見られる本殿が122件、流造が30件、入母屋造や隅木入春日造等、その他が10件確認できた。2017年度はこの成果について報告書を刊行する予定である。

この他、各地で実施されている文化財建造物保存修理事業・史跡整備事業にともなう建造物復原等について援助・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、文化的景観の具体的事例に関する取組として、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。

2012年度後半からは、従前の取組成果をふまえて、文化的景観の定着と保存・活用の促進等をはかる

ため、外部の専門家・実務者を含む『「文化的景観学」検討会』を編成し、広い視野から文化的景観の概念・調査・表現方法・計画・技術・制度等の体系化に向けた検討を深めてきた。今年度は4回の検討会を開催し、四万十市および岐阜市の文化的景観についてまとめ、『川と暮らしの距離感—四万十・岐阜』を刊行した。

文化的景観研究集会（第8回）を「地域のみかたとしての文化的景観」をテーマとして7月30～31日に開催し、テーブルディスカッション、ポスターセッション、エクスカージョン（京都市中川地区の北山杉の林業景観地）をおこなった。参加者は約110名であった。また、前年度に開催した文化的景観研究集会（第7回）「営みの基盤 生態学からの文化的景観再考」の報告書を刊行した。

その他、宇治市、金沢市、岐阜市、四万十市等の文化的景観について、現地で関係者等への聞き取り調査等をおこない文化的景観の保護のあり方に関する検討を進めた。また、当研究所ウェブサイトにおいて公開している重要文化的景観選定地区の情報について、最新情報を追加した。

地方公共団体からの受託研究については、京都市から受託して、京都市の文化的景観について市域の調査等を行けるとともに、「北山杉の林業景観」について、民家・集落等の調査、住民へのヒアリング、住民向けの調査報告をおこなった。また、南山城村から受託して、京都府選定「南山城村の宇治茶生産景観」の4地区の茶畑について、生活・生業に関する現地調査をおこなった。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等の整備については国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査をおこなっている。

2016年度は、前年度おこなった遺跡整備の研究集会の報告書『デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用』を刊行した。報告書の前半は発表内容7件の記録、後半は事例報告とし、各地の最新事例10件を掲載した。また、「近世城跡の近現代」をテーマとして遺跡整備活用研究集会を開催した。藩祖、桜、神社、顕彰碑、復元天守、近代建築遺構等をキーワードに近世城跡の明治以降の変容をどのように捉えるのか、整備にともなうどのような問題があるのか、現状と課題を共有することができた。

キトラ古墳関係の受託事業では、文化庁のキトラ古墳整備工事が完了し公開が始まり、整備報告書の執筆編集をおこなった。整備では墳丘近くに壁画の残存状況を示す乾拓板が設置されたが、国営飛鳥歴史公園と共催で遺跡見学と乾拓板の活用をおこなう体験学習会を2回実施した。高松塚古墳関係の受託事業では、高松塚古墳壁画の青龍と白虎、星宿図について乾拓板を製作した。

文化庁の「平城宮跡遺構展示館の露出展示改善に関する検討委員会」の開催に協力し、保存修復科学研究室とともに報告書の執筆をおこなった。

庭園の調査研究に関しては2016年度からの5カ年は近世庭園の歴史に関する研究会を開催するが、初年度は「織豊期～江戸時代初期の庭園」を対象とし、報告書を刊行した。近年の発掘調査で岐阜城跡織田信長居館や、肥前跡名護屋城跡および陣屋跡の庭園の実態があきらかになる中で、室町時代とは異なる織豊期の庭園とそれに関わる文化について認識を深めることができた。

また、奈良市教育委員会と進めている「奈良市における庭園の悉皆的調査」については民家の庭や美術館の庭等の現地調査をおこなった。

さらに、研究交流をおこなっている韓国文化財研究所とは新たな5カ年計画が始まり、2016年度は韓国に存在する近代の日本庭園について現地調査を実施した。その他、名勝法華寺庭園の実測調査や発掘庭園データベースの更新をおこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの4つの研究室は、それぞれの事業計画にしたがって埋蔵文化財に関する調査・研究を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に基づき専門的な助言や協力をおこなっている。2016年度の各研究室の活動内容は、以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、1) 考古遺物の保存処理法に関する調査研究、2) 遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究、3) 建造物の彩色に関する調査研究を実施している。

1) では①飛鳥寺塔心礎出土遺物中に真珠製遺物が存在することの科学的確認、②伝持田古墳群出土鉄剣の象眼の発見と鞘および柄部分の構造の解明、③深溝

松平家墓所出土の彩色ガラス杯の材質・技法の解明と保存処理、④平城宮跡出土木製遺物の一時保管中の水質に関する基礎データの収集、⑤出土漆製遺物に対するトレハロース含浸法の基礎研究、⑥鉄製遺物の腐食挙動の研究と新規脱塩法の最適条件の検討に取り組んだ。また、「文化財調査におけるイメージング技術の諸問題」をテーマとした研究集会を開催した。2) では①平城宮跡遺構展示館における環境調査、数値解析にもとづく遺構劣化の抑制試験の実施と検証、②大分市元町石仏の環境調査、塩類析出に関する室内実験、石仏表面の塩類除去法の検討、③ガランドヤ古墳における環境調査、通年の結露抑制に効果的な換気装置およびヒーター運用に関する現地検証作業、④高槻市ハニワ工場公園における環境調査と遺構の劣化状態調査による劣化原因の解明、塩析出に対する遺構展示館内の照明設備や換気の運用方法の影響の検討、⑤模擬古墳を用いた古墳石室内環境が金属製遺物の腐食におよぼす影響の検討、金属製遺物の古墳石室内での腐食速度に関する検討に取り組んだ。3) では①薬師寺東塔天井彩色および諸戸家住宅塗装の分析調査、②平城宮跡復原朱雀門ならびに復原大極殿における塗装の劣化状態調査、大極殿外周における水平面全天日射、紫外線強度および照度の実測調査に取り組んだ。

受託事業として、平城宮跡遺構展示館の保存活用に関する調査研究事業（文化庁）、2016年度国史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討および墳丘復元法検討業務（日田市）、松帆銅鐸・舌の調査研究（南あわじ市）、法隆寺若草伽藍跡西方の調査出土壁画片の調査（斑鳩町）の4件を実施した。また、連携研究として、松平忠雄墓出土品の保存処理に関する保存科学的研究（幸田町）を実施した。

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（文化庁）ならびに特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（文化庁）および文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設（キトラ古墳壁画体験館 四神の館内）の管理・運營業務（文化庁）において、壁画の劣化原因究明および修理のための材料調査、高松塚古墳石室石材の安定化対策、四神の館における壁画管理環境の調査と管理をおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

2016年度の発掘調査や整理、報告書作成としては、金井東裏遺跡や金井下新田遺跡（群馬県）、六反田南

遺跡や石船戸遺跡（新潟県）、保美貝塚（愛知県）、藤原宮跡（奈良県）から出土した動物遺存体や骨角製品の調査・分析をおこなった。

群馬県の金井東裏遺跡では、小札、鉄鏃装具、鉄鉾装具、刀子柄といった動物質遺物が、6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）の火砕流堆積物に覆われて出土した。加工された動物質遺物の素材同定は、形態的特徴が把握しづらいため、通常の動物遺存体よりも同定が困難な場合が多い。そこで、内面の組織構造を観察できる切断標本や、鹿角の大きさを推定するための分割標本（全長41～68cm）を作製して、素材同定をおこなった。その結果、同定できた資料はすべて鹿角であり、金井東裏遺跡では素材として鹿角が多用されていたこと、とくに小札は全長50cm以上、鉄鉾装具は全長60cm以上と推測される大型の鹿角を素材にしていたことがあきらかとなった。

東日本大震災の復興事業にともなう発掘調査や整理作業では、波怒棄館遺跡や台の下貝塚（宮城県）、堂の前貝塚や中沢遺跡（岩手県）への支援を継続的に進めた。また、藤原宮朝堂院朝庭、藤原宮大極殿院、平城京朱雀大路、平城京右京一条二坊・二条二坊、平城京左京二条二坊十一坪において、古環境復元のための調査を実施した。

研究成果の発信として、World Archaeological Congress、日本動物考古学会、条里制・古代都市研究会等の学会・研究会で発表をおこなった。社会還元や普及事業として、第31回国民文化祭のシンポジウムや台湾の中央研究院歴史語言研究所において講演をおこなった。

現生標本の収集と公開では、画像の高精度化、掲載部位の増加、解説文の追加等、三次元計測による立体的な骨格図譜のWebサイトを拡充・更新した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、考古学・建築史学・美術史学・歴史学等、文化財関連諸分野に資するべく、木製文化財の年輪年代学に関する調査・研究をおこなっている。

当研究所で開発したマイクロフォーカスX線CTやデジタル画像による調査手法は、非破壊を原則とする文化財調査に有効であるため、調査対象の拡大と活用をはかっている。また、標準年輪曲線の拡充による木製文化財の産地推定等、年輪年代学に関する基礎研究のほか、年輪年代調査への適用の可否を判断するため樹種同定調査もおこなっている。

2013年度から進めてきた国宝薬師寺東塔（以下、東塔）の調査では、東塔の建立当初の年代を示すと考

えられる8世紀前半に伐採された木部材を複数、見出した。特に、伐採年代を示す樹皮残存部材2点はいずれも「初重・支輪裏板」で、最外層の年輪について、一つは729年、もう一つは730年という年代が得られている。これは、730年頃に東塔が完成したという文献史料にもとづくこれまでの見解と非常によく一致する測定結果である。また、東塔を代表する部材の一つ「心柱・下」に残存するもっとも新しい年輪年代が、719年であることがあきらかとなった。これらの年代から、薬師寺が平城の現在の地へ移転したとされる718年には、少なくともこれら木部材用の木はまだ伐採されておらず、用材調達もおこなわれていなかったということがあきらかとなった。

また、多数の試料からなる標準年輪曲線を各地で構築する過程で、一括性の高い試料群を分析対象とすることにより、その試料群の同一材由来を推定できる事例が増大した。特に、平城京跡出土齋串群の分析調査では、四つの同一材由来グループに区分でき、その接合関係、原材復元と製作過程をあきらかにした。この結果、同一材を推定する調査手法では、通常年輪年代測定では対象としない年輪数の少ない試料も分析対象になり得ることがあきらかとなった。さらに同一材推定により接合し、最終的に100層以上の長期となったものは、年代測定の基準となる標準年輪曲線とも照合できる場合があることがあきらかとなった。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、遺跡の研究手法および文化財の調査手法の研究を主要な業務とする研究室である。現在、遺跡データベースの作成と運用、災害痕跡情報の収集と分析、文化財の計測、探査手法およびこれらを利用した研究手法の研究を主な課題としている。

遺跡データベースについては、古代官衙・寺院関係遺跡のデータベースの充実をすすめ、情報の抽出・整理を東日本を中心としておこなった。現状の公開データ数は95000件を上回った。また、古代官衙・集落研究会を都城発掘調査部と共催し、資料集および前年度の報告書を刊行した。

災害痕跡情報の収集と分析については、災害痕跡WEBGISデータベースのシステム構築およびデータ入力を進めており、サーバーへの実装試験をおこなっている。本データベースは拡張性が高く、今後災害痕跡情報を核に多様な情報を実装することが可能である。現在、注目が高い分野であり、引き続き活動を継続したい。

文化財の計測、探査については、ComputerVision技術を利用した画像による三次元測定を中心に検討をおこなった。特に、遺構の計測では迅速な作業への洗練と、従来の作業過程への導入についての検討をおこない、発掘調査現場による試行をおこなった。遺物については、土器・陶磁器や瓦の計測について実践をおこない、レーザースキャナーによる計測成果との比較検討をおこなっている。また、微細遺物の計測の可能性を探るため、多様な手法による計測を試みている。

探査については、宮崎県延岡市延岡城の被災状況の把握のための石垣の探査を実施した。また、基礎的な技術についての再検討と、主に位置情報の高精度かつ迅速な取得を目的として試験と開発をおこなった。

地質については、依頼による全国の発掘調査現場の分析をおこなうとともに、電子顕微鏡、粒度分布測定器、帯磁率計等の機器の稼働と解析をおこなった。

科学研究費助成事業国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）により、英国ヨーク大学にて遺跡探査技術の情報収集および技術を主眼に研究を実施した。探査情報や発掘成果の計測をはじめとする文化財の諸情報をいかに統合し、活用していくかは今後我が国の文化財行政の課題になると考えており、研究をさらに進展させていきたい。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、中国、韓国、カンボジアの3カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、ミャンマーに対して技術移転・人材育成に関する事業をおこなっている。また、イギリス、台湾の研究機関とも研究協力をおこなういっぽう、奈文研以外の機関がおこなう支援協力事業にも参加している。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

2016年度は北魏洛陽宮城の共同発掘調査で出土した遺物の調査を2回実施した。2016年9月に今井晃樹（都城発掘調査部）、栗山雅夫（企画調整部）を派遣し、軒丸瓦、鴟尾、鬼瓦の分類、観察および実測図作成、写真撮影をおこなった。また、2017年2月には今井晃樹、岩戸晶子、清野陽一（以上都城発掘調査部）を現地に派遣し、軒平瓦、鬼瓦、鴟尾、その他の道具瓦の分類、観察、実測図作成をおこない、現地では中国社会科学院考古研究所の研究員たちと、遺物の分類や製作技法について協議した。2月には同時に、

北魏洛陽宮城の発掘調査現場を見学し、発掘成果についても現地で議論した。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究院は、2015年3月19日締結の「友好共同研究議定書」第4条と「友好共同研究覚書」の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の考古学的研究を実施してきた。現在は両窯跡出土品の整理、調査・研究を共同で継続的に実施しており、双方での報告書刊行にむけての作業を進めている。

2016年度は、共同研究第4期5ヵ年計画の2年目にあたり、発掘報告書『鞏義黄冶窯』中国語版を刊行した。2002年から2004年にかけて発掘調査した河南省鞏義市黄冶窯跡と2005年から2007年にかけて発掘調査した同市白河窯跡から出土した資料の整理作業を進め、『鞏義黄冶窯』日本語版の刊行にむけての作業をおこなった。あわせて、河南省における唐三彩関連資料の調査も実施した。2016年度における河南省との共同研究にかかる相互の交流は、下記のとおりである。

2016年11月28日から12月2日まで、河南省文物考古研究院は馬蕭林、魏周興、張小虎、李輝、聂凡の5名の研究者を派遣し、奈文研を訪れ学術交流をおこなった。また、11月29日には奈文研にて、馬蕭林「黄河中流域における文明起源の歴史的時限とその特質」、李輝「2015-2016年鞏義黄冶窯出土の唐代瓷器について」の講演会を開催した。

2017年2月20日から23日まで、奈文研は巽淳一郎、降幡順子、神野恵、森川実、丹羽崇史の5名の研究者を河南省文物考古研究院に派遣し、『鞏義黄冶窯』日本語版の刊行に関する協議をおこない、相互の調整を進めた。このほか、河南省における唐三彩関連資料の調査を実施したほか、2月21日には河南省文物考古研究院主催の講演会にて、神野恵「日本大安寺出土唐三彩枕」、丹羽崇史「從窑具来看的唐三彩窯」の講演をおこなった。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

奈良文化財研究所と遼寧省文物考古研究所との共同研究は、2015年度をもって5ヵ年計画で遂行してきた「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」が完了した。2016年度から、新たな共同研究として「三燕文化出土遺物の研究」を開始すべく、中国側との調整作業を進めた。しかしながら、中国当局の審査手続きに時間を要し、今年度中の協定書締結にはいたらな

かった。2017年度中には、協定書を締結し、新たな共同研究に着手できる見込みである。共同研究着手後に、スムーズに調査を開始できるよう、研究計画を精査するとともに、文献調査等の準備作業を鋭意進めた。

また、2015年度に遼寧省文物考古研究所で実施した日中学術研究会「遼西地区東晋十六国時期都城文化研究学術検討会」の報告書刊行のための編集作業をおこなった。同報告書については、2017年度も引き続き編集作業を進め、2018年度までの刊行を目標としている。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に研究交流協定書を締結し、共同研究を実施してきた。2016年4月には研究交流協定書、共同研究合意書、発掘調査交流合意書を更新し、これにもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施した。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題にもとづき5回の派遣と5回の受入を実施した。研究成果は5ヵ年計画の最終年度にとりまとめる予定である。

発掘調査交流では、奈文研より国立慶州文化財研究所へ研究員1名を派遣し、新羅関連遺跡等において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約2ヵ月間であった。また、奈文研において国立慶州文化財研究所から研究員1名を受入れ、都城発掘調査部（飛鳥藤原地区、平城地区）において共同発掘調査を実施した。受入期間は約2ヵ月間であった。

●西アジア諸国の文化財保存協力事業

2003年度からアフガニスタン、イラクおよび周辺諸国の文化遺産保存修復に関わる事業を東京文化財研究所と共同で実施してきたが、近年は当該地域で事業をおこなうことが困難な状況にある。そのため、ヨーロッパ等で開催される西アジア・中央アジア諸国の文化遺産保護に関する会議への出席や、日本でのシンポジウム開催、中央アジア諸国における文化遺産保存修復事業への協力等、可能な範囲で事業を続けている。

2016年度は、6月にスペインでおこなわれたユネスコ・シルクロード・オンライン基盤国際ネットワーク会議に出席し、12月には、ドイツでおこなわれたバーミヤーン世界遺産保護専門家会議に出席した。11月に、シンポジウム「シリア内戦と文化遺産：世界遺

産パルミラ遺跡の現状と復興に向けた国際支援」（主催：東京文化財研究所、奈良文化財研究所、ユネスコアジア文化センター）を東京と奈良で開催した。11月には、ウズベキスタンにおいて、ファヤズテパ仏教遺跡から出土した壁画の保存修復作業に協力した。また、7月のイスタンブール（トルコ）と10月のパリ（フランス）に分けて開催されたユネスコの第41回世界遺産委員会に研究員1名を派遣し、特に議論となっている紛争や災害と文化遺産の問題について資料や情報の収集に努めた。

●カンボジアにおける共同研究

カンボジアとの共同研究では、2002年から対象遺跡をアンコールトム内の西トップ遺跡とし調査研究・修復活動を続けている。2015年度に南祠堂の解体修復が終了したのを受けて、続いて北祠堂の解体修復に着手した。2015年度中に北祠堂躯体部の解体を終わり、2016年度前半には上成基壇・下成基壇を順次解体した。下成基壇の解体と平行して、基壇中央部にトレンチを設定し、基壇構築状況を確認するとともに、中央祠堂との前後関係を確認した。

下成基壇の直下からはレンガを組んだ方約2m、深さ約1.5mの遺構が検出され、金小玉をはじめとする170点強の遺物が出土した。3D測量等の詳細な記録調査をおこなった後に、レンガ遺構を埋め戻し、下成基壇の再構築に着手した。2016年度末にはほぼ下成基壇の再構築が終了している。

●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業

2013年度から3年間、東京文化財研究所が文化庁から受託した「ミャンマーにおける文化遺産保護に関する拠点交流事業」のうち、考古分野の事業を、奈良文化財研究所が実施した。この経験をふまえて、「ミャンマーにおける発掘調査法・遺物研究法等の考古技術移転を目的とした拠点交流事業」をミャンマー考古・国立博物館局の4名を南部のモーラミヤインに派遣し、ミャンマーの考古学者3名、ヤンゴン大学の学生2名とともに窯跡および出土陶器の調査をおこない、技術移転をはかった。8月末には、ミャンマーの考古学者4名を日本に招へいし、ミャンマーで出土する土器・陶磁器の調査方法に関する研修と国際研究会をおこなった。12月には研究員4名を中部のピイに派遣し、考古学フィールドスクールにおいて講師他30名に対し、土器の実測方法に関する研修をおこなった。

●セインズベリー日本藝術研究所との研究交流

奈良文化財研究所とイギリスにあるセインズベリー日本藝術研究所は、2015年12月に日本考古学の国際的研究の推進事業を共同して実施することを目的に、共同研究の協定を締結した。2016年度はこれを受けて、国内最初の行事となる講演会『英国発！グローバル考古学』を、英国から2名の研究者を招へいして開催した。また、2004年から2005年にかけてドイツで開催した「曙光の時代 日本考古学の連続と変革」展図録の英語版刊行に向けて準備を進めた。イギリスでは2017年2月にはセインズベリー日本藝術研究所（ノリッチ）およびヨーク大学（ヨーク）において「考古学デジタル情報ワークショップ」を開催し、今後の共同研究の方向性について協議した。さらに、奈文研学報等の刊行物について、各報告書に収録されているEnglish Summaryをデータベースで公開し、英語での検索が可能になるよう準備を進めた。

●中央研究院歴史語言研究所との研究交流

台湾・中央研究院歴史語言研究所（以下、史語所）と奈良文化財研究所は、2016年2月に「国立文化財機構奈良文化財研究所と中央研究院歴史語言研究所の研究協力に関する協約書」を締結し、主として簡牘・木簡に関する研究資源化および研究の促進・深化を目指す共同研究に着手した。2016年度は史語所からの来訪1回、奈文研からの訪問1回の交流をおこない、赤外線画像取得方法の技術交流や、簡牘保存方法に関する意見交換、研究情報の交換等をおこなった。また、史語所発行の『居延漢簡（参）』（2016年10月）に共同研究の成果が盛り込まれた。

史語所とは、考古分野でも研究協力を進めている。2016年度は先方からの招へいにより、研究員3名が史語所を訪問して動物考古学・ガラス製ビーズの分析・情報考古学について研究発表をおこない、関連施設・遺跡を見学した。その後、研究協力協約書の締結に向けての準備を進めており、双方の得意とする研究内容について相互に交流をはかる予定である。

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 杉山 洋：カンボジア／'16.4.5～4.12／西トップ遺跡の調査修復／助成金
- 田村 朋美：中国／'16.4.8～4.11／The 24th International Congress on Glass に出席、研究発表／科研費
- 山藤 正敏：オーストリア／'16.4.23～4.30／第10回国際古代近東考古学会への参加／助成金
- 国武 貞克：マレーシア／'16.5.2～5.8／先史時代文化財の調査／他機関科研費
- 影山 悦子：フランス／'16.5.2～5.13／ソグディアナの考古・美術に関する史料調査、研究者との情報交換／先方負担、科研費
- 脇谷 草一郎：中国／'16.5.6～5.8／南京城壁の劣化状態視察および劣化要因に関する調査／科研費（分担金）
- 海野 聡：イギリス／'16.5.10～5.16／イギリスにおける復元建物および歴史的建造物の調査／科研費
- 今井 晃樹：韓国／'16.5.11～5.15／遺跡・遺物の調査／科研費
- 加藤 真二：中国／'16.5.12～5.21／霊井関連遺跡出土土器の調査／科研費
- 杉山 洋：カンボジア／'16.5.14～5.18／ポストアンコール期遺跡の調査研究／科研費
- 諫早 直人：韓国／'16.5.15～5.21／「古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造に関する考古学的研究」の類例調査／科研費
- 丹羽 崇史：中国／'16.5.20～5.25／中国考古学会大会への参加／科研費
- 廣瀬 覚：韓国／'16.5.24～5.27／研究遂行にかかるチャラボン古墳・金山里古墳出土発掘輪の資料調査／他機関科研費
- 森本 晋：タイ／'16.5.28～6.3／考古学協会ならびに東南アジア考古学会議出席／科研費
- 杉山 洋：タイ・カンボジア／'16.5.30～6.2／SPAF第2回シンポジウムへの出席およびシムリアアップでの事務所経費の支払い／科研費、運営費交付金
- 森本 晋：スペイン／'16.6.7～6.13／第2回ユネスコ・シルクロード・オンライン基盤国際ネットワーク会議出席・発表／運営費交付金、先方負担
- 丹羽 崇史：アメリカ／'16.6.7～6.18／第7回世界東アジア考古学会（SEAA7）での発表、関連資料の調査／科研費
- 金田 明大：イギリス、スウェーデン、デンマーク、フランス／'16.6.19～8.23／科研費（国際共同研究加速基金）による研

究／科研費

- 森本 晋：カンボジア／'16.6.20～6.25／アンコール地域遺跡調査修復事業国際調整整備委員会出席／科研費
- 杉山 洋：カンボジア／'16.7.4～7.10／ポストアンコール遺跡群の調査研究／助成金
- 佐藤 由似：カンボジア／'16.7.4～7.10／ポストアンコール遺跡群の調査研究／科研費
- 丹羽 崇史：韓国／'16.7.9～7.10／資料見学／科研費
- 森本 晋：トルコ、オーストリア／'16.7.9～7.25／ユネスコ世界遺産委員会出席、情報基準資料の調査／運営費交付金
- 浦 蓉子：韓国／'16.7.14～7.18／木器の類例調査／助成金
- 佐藤 由似：カンボジア／'16.7.25～7.29／ポスト・アンコール期に関する調査／科研費
- 加藤 真二：中国／'16.8.1～8.6／霊井関連遺跡出土土器の調査／科研費
- 影山 悦子：ミャンマー／'16.8.6～8.13／ミャンマー出土陶磁器の調査／受託
- 降幡 順子：ミャンマー／'16.8.6～8.13／ミャンマー出土陶磁器の調査／科研費（分担金）
- 杉山 洋：ミャンマー、カンボジア／'16.8.6～8.18／文明の東西回廊の関連調査（ミャンマーに於ける青磁窯の調査）、カンボジアに於けるポストアンコール遺跡の調査／科研費
- 佐藤 由似：ミャンマー、カンボジア／'16.8.6～8.23／ミャンマー出土陶磁器の調査、クメール黒褐釉陶器の調査／受託、運営費交付金
- 山口 欧志：モンゴル／'16.8.8～8.15／研究打合せおよび遺跡の踏査／科研費（分担金）
- 杉山 洋：カンボジア／'16.8.9～9.13／西トップ遺跡の調査修復／助成金
- 山藤 正敏：キルギス／'16.8.11～8.22／アク・ベシム遺跡出土資料の調査／科研費（分担金）
- 丹羽 崇史：台湾／'16.8.13～8.16／鋳型・金属製品の調査、打ち合わせ／助成金
- 田村 朋美：台湾／'16.8.13～8.16／鋳型・金属製品の調査、打ち合わせ／助成金
- 小田 裕樹：中国／'16.8.13～8.22／「東アジアにおける都城と葬地の政治的・社会的関連に関する比較史的総合研究」の一環として、河南省周辺地域の墳墓調査／科研費（分担金）
- 森本 晋：アメリカ／'16.8.15～8.22／太平洋近隣友好協会2016年総会合同研究会出席／運営費交付金

- 小田 裕樹：韓国／'16.8.25～8.27／「東アジアにおける都城と葬地の政治的・社会的関連に関する比較史的総合研究」の一環として、韓国・忠南大学での研究発表／科研費（分担金）
- 海野 聡：ブータン／'16.8.29～9.5／ブータンにおける歴史的建造物調査／科研費
- 渡邊 晃宏：イギリス／'16.8.30～9.5／「文字文化からみた東アジア社会の比較研究」シンポジウムへの参加／他機関科研費
- 今井 晃樹：中国／'16.9.3～9.11／北魏洛陽宮城出土物の調査／運営費交付金
- 栗山 雅夫：中国／'16.9.3～9.11／北魏洛陽宮城出土物の調査／運営費交付金
- 金田 明大：イギリス、スペイン、オーストリア／'16.9.4～12.23／科研費（国際共同研究加速基金）による研究のため／科研費
- 脇谷 草一郎：イギリス／'16.9.5～9.11／ICOMOS-ISCS2016に参加、研究発表／運営費交付金
- 佐藤 由似：カンボジア／'16.9.8～9.13／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 海野 聡：中国／'16.9.8～9.20／CIHA（世界美術史国際会議）における招待講演および山西省調査・資料収集／先方負担、科研費
- 森本 晋：カンボジア／'16.9.9～9.13／アンコール遺跡調査資料の調査／他機関科研費
- 浦 蓉子：中国／'16.9.13～9.25／中国田螺山遺跡の木製品調査／他機関科研費
- 山口 欧志：モンゴル／'16.9.13～9.28／遺跡の調査および国際シンポジウムに参加・発表／他機関科研費、科研費
- 石田 由紀子：中国／'16.9.16～9.23／古代の測量技術と尺度に関する資料調査／他機関科研費
- 佐藤 由似：カンボジア／'16.10.3～10.11／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 高妻 洋成：ベトナム／'16.10.6～10.9／タンロン皇城遺跡出土土木製遺物の調査と保存に関する技術協力／先方負担
- 西山 和宏：フィリピン／'16.10.9～10.14／文化遺産ワークショップ2016（ACCU主催）での講師／先方負担
- 芝 康次郎：韓国／'16.10.10～12.2／国立慶州文化財研究所との発掘交流／運営費交付金、先方負担
- 箱崎 和久：韓国／'16.10.19～10.22／皇龍寺址発掘調査40周年記念国際学術大会への参加／先方負担
- 鈴木 智大：台湾／'16.10.19～10.26／

台湾の古建築の建築史的調査／科研費

- 杉山 洋：カンボジア／'16.10.22～10.27／西トップ遺跡の調査修復／助成金
- 森本 晋：フランス／'16.10.22～10.30／アンコール遺跡調査資料、世界遺産委員会出席／科研費
- 高妻 洋成：オーストリア／'16.10.25～10.29／ウィーン世界博物館所蔵大名屋敷の模型の調査／科研費（分担金）
- 中村 一郎：台湾／'16.10.26～10.28／中央研究院歴史言語研究所での簡牘撮影、研究交流／科研費
- 桑田 訓也：台湾／'16.10.26～10.28／中央研究院歴史言語研究所での簡牘撮影、研究交流／科研費
- 杉山 洋：フランス／'16.11.1～11.6／ユネスコ主催、世界遺産と博物館国際会議への出席と発表／先方負担
- 丹羽 崇史：中国／'16.11.3～11.6／国際会議「商周青銅器及鑄造工藝研究」への参加／先方負担
- 庄田 慎矢：韓国／'16.11.3～11.6／韓国考古学会全国大会に参加／科研費（分担金）
- 降幡 順子：モンゴル／'16.11.3～11.6／モンゴル地域出土鉛釉陶器の資料調査／科研費
- 田村 朋美：ウズベキスタン／'16.11.6～11.12／ウズベキスタン出土のガラス製遺物等の調査／科研費
- 影山 悦子：ウズベキスタン／'16.11.6～11.12／イスラム以前の壁画等、考古遺物の調査／科研費
- 森本 晋：タイ／'16.11.11～11.14／国際学会「東南アジア大陸部の初期状態と文化関係」出席発表／他機関科研費
- 桑田 訓也：韓国／'16.11.16～11.19／韓国木簡学会学術大会における研究発表／先方負担
- 佐藤 由似：カンボジア／'16.11.17～11.26／アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築に関する調査、アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金、科研費
- 国武 貞克：中国／'16.11.18～11.23／霊井遺跡出土石器の調査／科研費
- 加藤 真二：中国／'16.11.18～11.28／霊井遺跡出土石器等の調査／科研費
- 杉山 洋：カンボジア／'16.11.23～11.25／西トップ遺跡の調査と修復／助成金
- 箱崎 和久：中国／'16.11.26～12.3／中国古代寺院遺跡と古代建築の現地調査／科研費
- 坪井 久子：中国／'16.11.26～12.3／中国古代寺院遺跡と古代建築の現地調査／科研費

- 大橋 正浩：中国／'16.11.26～12.3／中国社会科学院考古研究所との学术交流における中国都城遺跡の調査／運営費交付金
- 若杉 智宏：台湾／'16.11.30～12.2／天文図資料調査・施設視察／運営費交付金
- 石橋 茂登：台湾／'16.11.30～12.3／天文図資料調査・施設視察／運営費交付金
- 小沼 美結：台湾／'16.11.30～12.3／天文図資料調査・施設視察／運営費交付金
- 森本 晋：ドイツ／'16.11.30～12.4／第13回バーミヤーン世界遺産保護専門家会議出席／運営費交付金
- 佐藤 由似：カンボジア／'16.12.3～12.14／西トップ遺跡石材修復に関する調査、アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築に関する調査／助成金、科研費
- 森本 晋：台湾／'16.12.6～12.9／台湾中央研究院歴史言語研究所での研究発表と見学／先方負担
- 田村 朋美：台湾／'16.12.6～12.9／台湾中央研究院歴史言語研究所での研究発表と資料見学／先方負担
- 山崎 健：台湾／'16.12.6～12.9／台湾中央研究院歴史言語研究所での研究発表と見学／先方負担
- 森本 晋：ミャンマー／'16.12.9～12.16／発掘調査法・遺物研究法等の考古技術移転を目的とした拠点交流事業／受託
- 影山 悦子：ミャンマー／'16.12.9～12.16／発掘調査法・遺物研究法等の考古技術移転を目的とした拠点交流事業／受託
- 尾野 善裕：ミャンマー／'16.12.9～12.16／発掘調査法・遺物研究法等の考古技術移転を目的とした拠点交流事業／受託
- 大澤 正吾：ミャンマー／'16.12.9～12.16／発掘調査法・遺物研究法等の考古技術移転を目的とした拠点交流事業／受託
- 林 正憲：韓国／'16.12.12～12.15／「日韓古代瓦の生産と流通に関する研究」にかかる調査／運営費交付金、先方負担
- 石田 由紀子：韓国／'16.12.12～12.15／慶州古代寺院における出土瓦の調査／科研費、先方負担
- 清野 陽一：韓国／'16.12.12～12.15／慶州古代寺院における出土瓦の調査／科研費、先方負担
- 石橋 茂登：韓国／'16.12.12～12.16／日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査／運営費交付金、先方負担
- 廣瀬 覚：韓国／'16.12.12～12.16／日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査／運営費交付金、先方負担
- 諫早 直人：韓国／'16.12.12～12.16／日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査／運営費交付金、先方負担

担

- 渡邊 晃宏：韓国／'16.12.15～12.17／「2016東アジア文化都市 濟州」開幕式における講演／他機関負担、先方負担
- 杉山 洋：カンボジア／'16.12.18～12.25／西トップ遺跡の調査と修復／科研費
- 佐藤 由似：カンボジア／'16.12.19～12.27／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 丹羽 崇史：中国／'16.12.28～1.1／資料調査／高梨学術奨励基金
- 田村 朋美：ベトナム／'17.1.8～1.12／ハノイ国立博物館所蔵ガラス小玉の科学分析／他機関負担
- 佐藤 由似：カンボジア／'17.1.15～1.26／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 森本 晋：カンボジア／'17.1.23～1.26／アンコール遺跡調査資料の調査／科研費
- 金田 明大：イギリス／'17.1.23～3.2／科研費（国際共同研究加速基金）による研究／科研費
- 森本 晋：カンボジア／'17.1.31～2.2／アンコール文化遺産保護に関する研究／科研費
- 佐藤 由似：カンボジア、ミャンマー／'17.2.3～2.18／アンコール文化遺産保護に関する研究協力、国際協力拠点交流事業／運営費交付金、受託
- 杉山 洋：カンボジア、ミャンマー、ベトナム／'17.2.8～2.17／カンボジア・ミャンマー・ベトナムにおける東南アジア陶磁の研究／運営費交付金、科研費（分担金）
- 森本 晋：ミャンマー／'17.2.9～2.18／ミャンマーの窯跡および陶磁器の調査、研修／受託
- 影山 悦子：ミャンマー／'17.2.9～2.18／ミャンマーの窯跡および陶磁器の調査、研修／受託
- 石橋 茂登：台湾／'17.2.16～2.19／金属工芸・天文関連の資料調査／運営費交付金
- 今井 晃樹：中国／'17.2.18～2.26／北魏洛陽宮城出土遺物の調査／運営費交付金
- 岩戸 晶子：中国／'17.2.18～2.26／北魏洛陽宮城出土遺物の調査／運営費交付金
- 清野 陽一：中国／'17.2.18～2.26／北魏洛陽宮城出土遺物の調査／運営費交付金
- 廣瀬 覚：韓国／'17.2.19～2.22／「朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史」の研究会への参加／他機関負担
- 諫早 直人：韓国／'17.2.19～2.22／「朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史」の研究会への参加／他機関負担

- 丹羽 崇史：中国／'17.2.20～2.23／河南省文物考古研究院との共同研究報告書出版にともなう協議、資料調査／運営費交付金、先方負担
- 神野 恵：中国／'17.2.20～2.23／河南省文物考古研究院との共同研究報告書出版にともなう協議、資料調査／運営費交付金、先方負担
- 降幡 順子：中国／'17.2.20～2.23／河南省文物考古研究院との共同研究報告書出版にともなう協議、資料調査／運営費交付金、先方負担
- 森川 実：中国／'17.2.20～2.23／河南省文物考古研究院との共同研究報告書出版にともなう協議、資料調査／運営費交付金、先方負担
- 佐藤 由似：カンボジア／'17.2.21～2.27／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
- 国武 貞克：イギリス／'17.2.23～3.2／奈文研とヨーク大学、セインズベリー日本藝術研究所による文化財情報発信（全国遺跡総覧）に関するワークショップ／運営費交付金
- 高田 祐一：イギリス／'17.2.23～3.2／奈文研とヨーク大学、セインズベリー日本藝術研究所による文化財情報発信（全国遺跡総覧）に関するワークショップ／運営費交付金
- 小沼 美結：イギリス／'17.2.23～3.2／奈文研とヨーク大学、セインズベリー日本藝術研究所による文化財情報発信（全国遺跡総覧）に関するワークショップ／運営費交付金
- 浦 蓉子：中国／'17.2.27～3.4／中国田螺山遺跡の木製品調査／他機関科研費
- 高妻 洋成：モンゴル／'17.3.5～3.11／モンゴル国の古墳壁画等と高松塚古墳壁画の比較研究調査／受託
- 石橋 茂登：モンゴル／'17.3.5～3.11／モンゴル国の古墳壁画等と高松塚古墳壁画の比較研究調査／受託
- 脇谷 草一郎：モンゴル／'17.3.5～3.11／モンゴル国の古墳壁画等と高松塚古墳壁画の比較研究調査／受託
- 田村 朋美：モンゴル／'17.3.5～3.11／モンゴル国の古墳壁画等と高松塚古墳壁画の比較研究調査／受託
- 栗山 雅夫：モンゴル／'17.3.5～3.11／モンゴル国の古墳壁画等と高松塚古墳壁画の比較研究調査／受託
- 大谷 育恵：モンゴル／'17.3.5～3.11／モンゴル国の古墳壁画等と高松塚古墳壁画の比較研究調査／受託
- 佐藤 由似：カンボジア／'17.3.6～3.13／アンコール文化遺産保護に関する研究協

力／運営費交付金

- 海野 聡：ブータン／'17.3.6～3.16／ブータンにおける歴史的建造物調査／科研費
- 丹羽 崇史：韓国／'17.3.7～3.10／日韓共同研究の一環として、韓国・慶州地域出土土器類の調査／運営費交付金
- 小田 裕樹：韓国／'17.3.7～3.10／日韓共同研究の一環として、韓国・慶州地域出土土器類の調査／運営費交付金
- 内田 和伸：韓国／'17.3.7～3.10／韓国国立文化財研究所との共同研究／運営費交付金、先方負担
- 中島 義晴：韓国／'17.3.7～3.10／韓国国立文化財研究所との共同研究／運営費交付金、先方負担
- 杉山 洋：カンボジア／'17.3.7～3.11／カンボジアにおける東西交流遺物の調査／科研費（分担金）
- 前川 歩：ブータン／'17.3.7～3.16／ブータンにおける歴史的建造物調査／科研費
- 加藤 真二：中国／'17.3.13～3.18／鄭州における旧石器遺跡の調査／科研費
- 森本 晋：ドイツ／'17.3.13～3.20／東アジア陶磁器資料・パガン壁画資料の調査／運営費交付金
- 諫早 直人：イギリス／'17.3.16～3.26／「ゴラント・コレクション総合研究の新知見に基づく日本古墳時代像・研究史の再構築」にかかる調査／科研費（分担金）
- 脇谷 草一郎：中国／'17.3.19～3.21／南京城壁の劣化状態視察および劣化要因に関する調査／科研費（分担金）
- 渡邊 晃宏：韓国／'17.3.22～3.24／国立文化財研究所との共同研究による木簡等の調査／運営費交付金、先方負担
- 方 国花：韓国／'17.3.22～3.24／国立文化財研究所との共同研究による木簡等の調査／運営費交付金、先方負担
- 高田 祐一：韓国／'17.3.22～3.24／国立文化財研究所との共同研究による木簡等の調査／運営費交付金、先方負担
- 山本 祥隆：韓国／'17.3.22～3.24／国立文化財研究所との共同研究による木簡等の調査／運営費交付金、先方負担
- 佐藤 由似：カンボジア／'17.3.22～3.24／西トップ遺跡の調査／運営費交付金
- 森本 晋：カンボジア／'17.3.22～3.26／外国調査チーム報告会出席・発表／運営費交付金
- 田村 朋美：アメリカ／'17.3.23～3.26／X線CT装置の検査／運営費交付金
- 高妻 洋成：オーストリア／'17.3.25～3.30／ウィーン世界博物館所蔵大名屋敷の模型の調査／科研費（分担金）

公開講演会

第8回東京講演会（一橋講堂）

2016年11月13日

◆若杉 智宏「あすかの宇宙（そら）—飛鳥人のみた星空—」

飛鳥にあるキトラ古墳の石室天井には、中国式の天文図が残されていた。本発表では、キトラ天文図を通して、古代飛鳥の天の世界観や中国天文学について紹介した。

まず、天文図に描かれた星座の内容から、この天文図を、天体の科学的知識や中国の天の思想が古代飛鳥に確実に伝わっていた物証と捉えた。次に、キトラ天文図の星座と現代の星座の比較をおこない、細部には違いがみられるものの、恒星の相対的位置関係はほぼ正確に描かれていることを指摘した。そして最後に、中国・朝鮮半島等の壁画との比較から、キトラ天文図を、現代の星図とも比較可能な世界最古の本格的な中国式星図と評価した。

◆山本 崇「飛鳥・藤原の木簡を紐解く」

『飛鳥むかしむかし』に掲載された木簡を素材に、木簡が語る7世紀史を平易に解説した。前半は「『飛鳥むかしむかし』と7世紀木簡」と題して12点の木簡を紹介し、7世紀木簡が律令国家の成立過程とみごとに対応していることを紹介した。後半は「飛鳥・藤原木簡にみる古代びとの死と誕生」と題して、天武天皇が白朮という薬を服用しており胃を患っていたと思われること、大宝元年（701）11月に具犬養橘宿祢道代（三千代）に贈られた「紐」の木簡を新たに「十七」日と読み進めた上で、そこから光明子の誕生日が11月11日の可能性が有ること等、最新の調査研究成果を紹介した。

◆大澤 正吾「藤原宮の幢幡遺構—大宝元年の元日朝賀と儀仗旗—」

『続日本紀』には、大宝元年（701）の元日朝賀で、7本の幢幡（鳥形幢、東に日像、青龍・朱雀幡、西に月像、玄武・白虎幡）が初めて藤原宮に立てられたとある。藤原宮大極殿院南門南側の調査で、この幢幡遺構を確認し、これまで知られていたものと配置や構造が異なることがあきらかとなった。講演では、調査の経緯を紹介しながら、古代史上重要な歴史の一場面を初めて具体的に復元できるようになったこと、その意義がきわめて大きいことを報告した。講演にあたって、復元した四神幡を会場に立て、早川和子さんのイラストを交える等、より理解しやすいものとした。

◆諫早 直人「飛鳥寺の発掘と塔心礎埋納品—飛鳥寺発掘60年—」

2016年は奈良文化財研究所が飛鳥藤原地域の発掘調査を開始して、60年という節目の年であった。本発表ではその嚆矢となった飛鳥寺の発掘調査を振り返るとともに、現在飛鳥資料館で整理作業を進めている塔心礎埋納品の意義について検討をおこなった。

飛鳥寺の造営にあたっては百濟からの国家的支援があったことが文献史料に記されるいっぽうで、塔心礎埋納品については古墳出土品との関係が強調されてきた。本発表では、近年あいついで発見された百濟の扶余王興寺や益山弥勒寺の舍利荘嚴具と比較することで、飛鳥寺塔心礎埋納品について新しい解釈を試みた。

◆松村 恵司「貨幣誕生—飛鳥・藤原の銀銭と銅銭」

7世紀の貨幣関係記事の解釈をめぐる、江戸時代以来、長い論争が続いてきた。講演では、その研究史を紹介するとともに、近年発見の飛鳥・藤原地域の銭貨や木簡等の分析を通してあきらかになった金属貨幣出現期の貨幣史を実証的、体系的に解説した。特に天武12年の詔で、使用が禁止された銀銭と、使用を命じられた銅銭の関係について、遺物と文献史料の総合的な解釈をおこない、無文銀銭から富本銭、そして和同銀銭から和同銅銭にいたる貨幣政策の流れが、律令国家の建設、特に藤原京や平城京の都城造営と不可分の関係にあることを考証した。

第118回公開講演会

2016年6月18日

◆神野 恵「平城宮佐伯門前のいま、むかし—奈文研本庁舎の発掘調査成果から—」

奈良文化財研究所本庁舎の建替えにともなう事前の発掘調査においてみつかった遺構について講演をおこなった。本庁舎の敷地内は、ほとんどが秋篠川の旧河道にあたる。この旧河川を運河として整備した可能性が高いこと、最終的には敷葉・敷粗朶工法を用いて埋め立てて、一条南大路と西一坊大路の条坊道路を造営していることがわかった。この調査では、地震痕跡がみつかったことや、ドローン撮影による垂直写真、動植物遺体の分析等、奈文研の総力を投じた発掘調査であり、各方面で大きな成果が得られたことを報告した。

◆海野 聡「復元を学問する—「復元学」の誕生と未来—」

2014～2016年度の科学研究費研究、「復

元学」構築のための基礎的研究（挑戦的萌芽研究）の成果を一般向けに説明したもので、江戸時代よりおこなわれてきた考証と建築史学が成立した後の復元の歴史をひも解くとともに、中国・韓国・イギリスにおける復元の事例を取り上げて、現状を報告した。そして、単一の案だけではなく、多様な復元案の提示と表現方法の必要性について、提言をおこない、復元建物の受け手の考え方の重要性を説いた。

◆山本 祥隆「なんと美しき平城京～都づくりの日々の一コマ～」

平城京に都が遷されたのは西暦710年であり、年号を覚えるために「なんと美しき平城京」という語呂合わせを教わることもある。いっぽう、平城京は一夜にして完成した都ではなく、生き生きとした歴史像を描くには、遷都前後の紆余曲折やその後の足取り等も見逃してはならないであろう。

本講演では、これまでに自身が携わった発掘調査の体験等もふまえつつ、造平城京司や造興福寺仏殿司といった造営事業を担当した官司に着目しながら遷都前後の時期の平城京、特にその《動的側面》について探究した成果を紹介した。

第119回公開講演会

2016年11月5日

◆松村 恵司「藤原宮の幢幡遺構—文物の儀ここに備われり—」

2016年の飛鳥藤原第189次調査で、大宝元年の元日朝賀で樹てならべた7本の幢幡遺構を発見した。その配置は奈良時代の幢幡の直線配置と異なっていたが、各柱穴に樹てられた銅鳥幢、日・月像、四神幡の種類を特定するとともに、その思想的背景を、高松塚・キトラ古墳の壁画、富本銭の七曜文と一体的に考察し、遺構に投影された陰陽五行思想の世界観を読み解いた。7本の幢幡は江戸時代の天皇の即位式にも用いられ、天皇の統治を象徴する儀仗旗として千年以上継承された。また、中央の鳥形幢が八咫鳥であるのか、太陽を象徴する三足鳥であるのか検討を加えた。

◆星野 安治「年輪年代学の新しい可能性を目指して」

年輪年代学は、狭義には年輪曲線の照合による年代測定を指すが、広義には樹木の年輪成長が地域的な気候要素の影響を受けて変動する特性を生かし、古気候の復元や木材の産地推定をおこなう等を含む、木の歴史に関わる総合的な学問分野である。講演者は、広義の年輪年代学による取組が、木製文化財の秘める新たな価値を引き出

し、そのことが歴史科学と自然科学の総合的な研究につながると考えている。そこで本講演では、現在、日本における年輪年代学の新しい可能性を目指して進めている研究のうち、広葉樹材製民具や近世江戸で出土した木棺材の年代測定と産地推定、また、平城京跡出土の斎串や木簡の同一材由来の推定に関する成果を紹介した。

◆国武 貞克「木製品からみた古代役人の生活」

平城宮跡東方官衙地区で2008年に発掘したごみ捨て穴の発掘調査成果をもとにして、古代役人の生活について講演した。このごみ捨て穴は、高い地下水により通常では遺存しづらい有機質遺物が非常によく遺存しており、とくに様々な木製品が検出され考古学的な新しい発見も多く得られた。その中から、薄板を閉じ合わせた扇である檜扇についての新知見を紹介した。またごみ捨て穴の下層からは、排便を溜めた土坑が検出され、微小残留物や寄生虫卵の分析から分かる当時の食生活を紹介した。

研究集会

◆文化的景観研究集会（第8回）

2016年7月30～31日

文化的景観研究集会（第8回）「地域のみかたとしての文化的景観」を開催した。初日は奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂にて、当研究所刊行物『地域のみかた 文化的景観学のすすめ』（2016年3月刊行）をテーマとしたテーブルディスカッションをワークショップ形式でおこなった。また、ポスターセッション（学術研究部門/地域活動部門）をおこなった。2日目は、北山杉の里と呼ばれる北山林業の盛んな京都市北区中川北山町にて、「中川村おこしの会」の協力のもとエクスカージョンを実施した。参加者は、初日は110名、エクスカージョンは50名であった。また、ポスターセッション18題の発表があった。（本間 智希）

◆古代官衙・集落研究集会（第20回）

2016年12月9日～10日

2016年度は「郡庁域の空間構成」と題して研究集会を開催した。

研究報告は、海野聡「遺構からみた郡庁建物の機能と荘嚴」、西垣彰博氏「九州の郡庁の空間構成」、雨森智美氏「近畿・中国・四国の郡庁の空間構成」、田中弘志氏「中部の郡庁と空間構成」、栗田一生氏「関東の郡庁の空間構成」、藤木海氏「東北の

郡庁の空間構成」、吉松大志氏「文献からみた郡庁の空間構成と変遷」の計7本である。発表終了後、坂井秀弥氏の司会による総合討議をおこない、各地の郡庁域の構造と変遷および歴史的背景に関する活発な討議が交わされた。

参加者は、地方公共団体・大学関係者等計138名で、アンケートでは97%が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究会の研究報告を2017年度に刊行する予定である。

このほか、2015年度に実施した研究会の研究報告『官衙・集落と土器2』を2016年12月に刊行した。(小田 裕樹)

◆遺跡整備・活用研究会

2016年12月16日

「近世城跡の近現代」をテーマとして遺跡整備活用研究会を開催した。発表者と内容は、高木博志氏(京都大学)「郷土愛」と城跡の近代-藩祖と桜を中心に-、羽賀祥二氏(名古屋大学)「近世城跡の神社と顕彰碑」、野中勝利氏(筑波大学)「城址の公園化と風致、模擬天守閣と景観」、内田和伸「近世城跡の近現代遺構-建築・公園・庭園-」で、総合討議では丸山宏氏(名城大学)と森山英一氏(城郭研究家)が加わった。近世城跡の整備に関わり、明治以降の変容をどのように捉えるのか、現状と課題を共有することができた。

(内田 和伸)

◆古代瓦研究会(第17回)

2017年2月4日~5日

「8世紀の瓦づくりVI-飛雲文軒瓦の展開-」をテーマとして、奈文研平城宮跡資料館講堂においてシンポジウムを開催した。参加者は地方公共団体・大学・研究機関関係者等118名(2日間のべ219名)である。4日は林正憲「平城京の飛雲文軒瓦」、田中久雄氏「近江の飛雲文軒瓦1」、北村圭弘氏「近江の飛雲文軒瓦2」、佐藤隆氏「河内の飛雲文軒瓦」、翌5日には中島信親氏「長岡京の飛雲文軒瓦」、前田清彦氏「三河の飛雲文軒瓦」、山口耕一氏「下野の飛雲文軒瓦」の研究報告、須藤梢氏「伊勢の飛雲文軒瓦」、長谷川一英氏「備前・備中の飛雲文軒瓦」の発表および資料観察会をおこなった。5日午後には、今井見樹の司会により総合討議をおこない、近江の飛雲文軒瓦の製作技法の特徴と年代観、平城京ほか各地の飛雲文軒瓦の文様・製作技法との比較検討等とその背景について活発な議論が交わされた。

なお、今回のシンポジウムの成果は2018年度に刊行する予定である。(清野 孝之)

◆保存科学研究集会

2017年3月3日

文化財の調査において欠くことのできない画像記録、イメージング技術を取り上げ、「文化財調査におけるイメージング技術の現状と諸問題」と題して、研究会を開催した。文化財調査におけるイメージングに関する基調講演および5件の研究発表の後、総合討議をおこなった。記録、可視化技術、化学分析の結果を2次元的に表示するマッピング技術、膨大な点群データを用いた3次元イメージ構成技術等の定量的な計測技術を含むイメージング技術について議論を深めるとともに、その汎用性、精度、経済性、画像データの共有化等について議論した。文化財調査におけるイメージング技術は今後も発展性が期待できるものということができよう。(高妻 洋成)

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究(S) 継続

A木簡資料の情報取得の効率化では、アノテーションツールについて、ホットキーで現れているタブ間の推移、アノテーション情報のエクスポート機能を追加した。

B木簡資料に関する様々な知の結集では、(1)古代木簡の文字約900の見出し字について、標準字体約2,250の一覧作成を終えた。(2)木簡研究文献一覧について、約6,000件の木簡に関する研究文献累計約10,600件を入力し、うち約2,200件の木簡に関する累計約2,500件を木簡字典に搭載した。(3)古代地名検索システムについて、異表記データの充実のため木簡の地名表記約1,900件のデータを作成し、また異訓、部分一致、改編等のボタンを追加した。

C出土文字資料統合データベースの構築と連携の拡充では、(1)「木簡・くずし字解析システム-MOJIZO-」について、①解析画像履歴の収集開始、②4カ国語による画面案内の追加、③「MOJIZO」の商標登録出願(東京大学史料編纂所と共同)のほか、④スマホ・タブレット版の公開、⑤画像処理アプリMOJIZOkinの公開(研究分担者の桜美林大学末代誠仁氏の開発による)をおこなった。(2)データベースの統合、すなわち従来の木簡DBと木簡字典を一本化し、テキスト検索と画像検索の2つの窓口をもつ統合DBへの高次化の準備作業に前倒して着手した。(3)台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵簡牘の撮影、韓国国立伽耶文化財研究所への「MOJIZO」の紹介

を含め、国内外の研究機関との連携を推進した。

◆マルチチャンネル機器を利用した高速遺跡探査技術の開発

代表者・金田 明大 基盤研究(A) 継続

最終年度の2016年は、稼働を確認した機器による探査の実施と成果の確認をおこなった。また、計測位置精度の向上を目的としたSLAM技術の導入と検討をおこなった。この結果、LiDARやSfM(Structure from Motion)による計測位置の決定が実用的に可能であり、効果的であることを示すことができた。今後、この研究を進めて、低コストで障害物の多い対象での遺跡探査の効率化や周辺地形の計測との連携等を達成したい。

◆アンコール遺跡群を事例とした考古情報資源共有化に関する研究

代表者・森本 晋 基盤研究(A) 継続

本研究は、カンボジアのアンコール遺跡群における調査・研究成果の蓄積を整理し情報共有するための有効な手段の開発を目指している。4ヵ年計画の最終年度にあたる2016年度は、2月に取りまとめの会議を開催した。情報に対する検索用語の自動体系化に関する研究の進展状況について検証をおこない、研究の集約をはかった。また、個人的なコレクションにのみ残されている情報を活用する方法に関する議論等をおこなっている。今後にも続く課題として、アンコール保存事務所が所蔵する遺物に関して、一度データベース化がなされたものの、印刷されたデータのみが伝わっている状況から再データベース化が必要となっている点等を検討している。

◆歴史的文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究

代表者・馬場 基 基盤研究(A) 継続

本研究は、歴史的な文字に関する様々な経験知について、情報学の技術・手法も導入しつつ、研究資源化を進め、歴史・文字研究の深化と発展を目指す。2016年度は、気付きメモ(気づきを任意に記述)約2,300件、観察記録シート(文字の観察をフォーマットで整理)約9,300文字件を蓄積した。

この成果の蓄積をもとに、関係者による研究会で研究成果の共有や方向の検討をおこなった。特に今年度は、近世文書に関するデータとその分析から、現在の分析の方向の有効性を確認することができた。このほか、『漢字字体史研究 二』(石塚晴通監修、高田智和・馬場基・横山詔一編。勉誠

出版)を出版した。

◆「発掘遺構による古代寺院建築史の構築」

代表者・箱崎 和久 基盤研究 (A) 継続

発掘調査で検出した古代寺院の遺構を集成し、それを分析するというオーソドックスな手法で古代建築史を見直そうというのが研究の大きな目的である。それとともに、近年の研究によって、地方寺院間や官衙との関係から、瓦の生産体制や流通についてもあきらかになってきている。発掘遺構の分析とともに、瓦研究の成果を総合して古代寺院建築史を検討したいと考えている。

2016年度は、2015年度に引き続き、発掘遺構の集成作業、および帰属遺構が判明する出土瓦の集成作業を重点的におこなった。発掘遺構の集成作業では、奈良文化財研究所が公開している古代寺院データベースを利用しながら、九州・中部・関東地方を中心とする遺構の収集をおこない、中部・関東・東北地方の収集を継続している。その結果、293の遺跡で遺構を確認し、そのうち金堂は74件、講堂が62件、塔が91件、門は67件等のデータを収集した。今後も同様の作業を継続しながら、データベースの作成と分析を進めていく予定である。

瓦研究に関しては、主に軒瓦の同範関係と製作技法の把握、道具瓦の収集に主眼をおいている。発掘遺構の集成作業と同じく、古代寺院データベースをもとに、遺構が確認されている寺院遺跡から出土した瓦磚類について集成をおこなった。2016年度は、関東と東北地方の計156遺跡についてデータを収集した。また、古代の地方寺院においては、瓦生産や流通について、官衙遺跡と密接な関連性がある場合も多い。このため関東と東北の20遺跡の官衙関連遺跡についても同様の作業をおこなった。今後は類似の先行研究との整合等の検討をおこなっていききたい。

◆中国漢代の木槨・木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義

代表者・光谷 拓実 基盤研究 (B) 継続

2017年度は漢代木棺材の新たな出土情報を得られず、追加の試料収集はできなかった。現時点で作成しているフローティングクロノロジーは564年間分である。この年輪パターンの年代範囲を知るために、AMS法を用いたウイグルマッチング法による放射性炭素年代測定をおこなった。

試料の最外年輪の暦年代(1~5年輪目の年代)は1σの暦年代範囲(確率68.2%)において、155~118B.C.(95.4%)となる結果が得られた。これより、564年間分の

年輪パターンは、紀元前6世紀中頃から紀元後1世紀初め頃の年代をカバーしていることがわかった。

◆弥生時代における青銅器生産の総合的研究

代表者・難波 洋三 基盤研究 (B) 継続

2016年度は、三重県高茶屋1・3号鐸、香川県天満・宮西遺跡出土銅鐸破片、漢鏡9面について、成分分析や鉛同位体比分析を実施した。特に、近畿式銅鐸の最古型式である突線鈕2式の高茶屋1号鐸がa領域の鉛を含むことを確認できたことは、近畿式銅鐸の成立が大きな社会変化と連動しているという説を支持する、重要な成果である。なお、香川県天満・宮西遺跡出土銅鐸破片、岡山県新明鐸、大阪府明和池遺跡出土鑄造関係資料については、分析・検討結果を報告書等に公表した。また、兵庫県松帆出土の銅鐸7個のうち、3号鐸と鳥根県加茂岩倉27号鐸、5号鐸と鳥根県神庭荒神谷6号鐸が同範であることを新たにあきらかにした。

◆文化財および美術工芸材料のナノ構造と物性・機能の解明

代表者・北田 正弘 基盤研究 (B) 継続

高松塚古墳試料では、壁画の表面から検出される鉛の微細構造を研究した。漆喰(CaCO₃)の上には炭酸鉛(PbCO₃)層があり、その間に2種のPb酸化物を析出物として含む中間層が存在し、この中間層はCaCO₃とPb₃CO₃の反応によって生じたもので、論文として公表した。日本刀の研究では試作した直接焼入れ試料の内部構造と機械的性質を調べた。古代中国の水没墓から出土した炭化した絹地の絵画布を軸仕立てで修復し、顔料について調べた。このほか、油絵顔料についてのナノ粒子構造をあきらかにした。

◆東大寺を中心とする南都の未整理文書聖教の復元的調査研究

代表者・吉川 聡 基盤研究 (B) 継続

本研究は、東大寺に膨大に存在する未整理の文書聖教について、基礎的な調査を進め、その検討を通じて、伝来過程や組織の内実等を理解しようとするものである。あわせて、南都の寺社等に伝来していた文書聖教について、その把握につとめ、伝来状況等をあきらかにすることを意図している。

3年目である2017年度は、新修東大寺文書聖教の第85函の調査・写真撮影を実施した。さらに、東大寺所蔵の興福寺関係資料について、明治初年の日記の一部を翻

刻した。また関連する資料である、個人所蔵の興福寺関係資料について、調査・写真撮影を実施した。

また、東大寺中性院が所蔵する襖・屏風の下張り文書について、糊を剥がし調査する作業を、研究分担者の横内裕人氏が中心となって実施した。

◆アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築

代表者・杉山 洋 基盤研究 (B) 海外 継続

2016年度はおもにアンコール遺跡群のアンコール・トム内におけるアンコール王朝末期の遺跡に関する調査をおこなった。西トップ遺跡において発見されたレンガ遺構の発掘調査をおこない、アンコール王朝末期、14世紀代における祠堂建築時祭祠の様相をあきらかにすることができた。

さらに遷都した後のロンヴェーク王都においては、オーストラリア・フリンダース大学と共同して発掘調査をおこない、金属器生産遺跡等の検出をおこなった。

また生産遺跡の調査として黒褐釉陶器の窯跡調査をおこない、窯体の確認と生産された黒褐釉陶器の分析をおこなった。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

代表者・松村 恵司 基盤研究 (B) 継続

新4ヶ年計画の2年目にあたる2016年度は、前年度の北陸道諸国を対象にした和同開珎出土遺跡の分析を通して得られた官衙関連遺跡と和同開珎出土遺跡の密接な関係を検証すべく、奈良文化財研究所の「地方官衙関係遺跡データベース」と「古代寺院遺跡データベース」を利用して、各国の官衙と寺院遺跡の分布図を作成し、和同開珎出土遺跡の分布図と比較対照する作業を進めた。また、古代銭貨研究の基礎資料整備の一環として、黒川古文化研究所が所蔵する下間寅之助の『虎徳楼搦模帖』の複写版を出版し、滋賀県「沖の島出」と大阪「淀川堀」銭貨の性格について考察した。

◆東アジア旧石器・新石器移行期の基礎的研究—河南靈井遺跡出土品の徹底分析—

代表者・加藤 真二 基盤研究 (B) 海外 継続

河南省文物考古研究院の協力のもと、東京大学、熊本大学、弘前大学、北海道大学、北海道教育委員会、奈文研所属の連携研究者、研究協力者と、5月：扁扁洞出土品の調査(山東)、靈井出土土器の圧痕調査、8月：旧石器時代後半期から新石器時代前半期の調査研究の成果の把握(吉林)、

11月：霊井出土の土器、磨盤・磨棒の実測、計測ならびに残留澱粉粒・使用痕分析の調査をおこなった。また、これまでの調査成果を2篇の論文とし、Quaternary Internationalに投稿、受理されるとともに(現在 in Press)、北アジア調査研究報告会で装身具に関する研究報告をした。

◆ツガ年輪による近世以降の建造物の年代測定及び用材産地推定手法の確立

代表者・藤井 裕之 基盤研究 (C) 継続

2015年度に予定していた調査の目的が立たなくなり、承認を得て前年度終了の当初計画を1年間延長し旅費に関係する費用のみを繰り越した。本課題によるツガ年輪データの収集は、2016年11月から2017年1月にかけておこなった愛媛県内子町、および高知県四万十町における近代建築の調査で締めくくった。懸案となっている古材と現生材の直接的なパターン接続を目的としたものである。その成否は2017年夏～秋頃に判明する見込みである。

◆中国由来の木彫像の用材観

代表者・伊東 隆夫 基盤研究 (C) 継続

2016年度は9月に米国のボストンを皮切りに、ウォーチェスター、クリーブランド、ニューヘブーン、プリンストン、ニューヨークと移動し、下記の9か所の美術館を訪問し、それぞれの美術館の協力により合計21体の中国由来の木彫像から26試料の提供を受けた。

1. Museum of Fine Arts, Boston
2. Isabelle Stewart Gardner Museum
3. Worcester Art Museum,
4. RISD Museum
5. Harvard Univ. Art Museum
6. Cleveland Museum of Art
7. Yale University Art Galleries,
8. Princeton University Art Museum
9. Brooklyn Museum, New York

これら木彫像につき、顕微鏡標本を作製し、用材の樹種同定をおこなった結果キリ属製木彫像：8体、ヤナギ属製木彫像：7体、ビャクダン製木彫像：1体、トチノキ製木彫像：1体、サワグルミ属製木彫像：1体、キササゲ属製木彫像：1体、クスノキ科性木彫像：1体であることが判明した。

目下、それぞれの美術館に結果を報告すべく、樹種同定結果の報告書を作成中である。

◆法隆寺・東大寺宝物に見られる「イラン文化」：エフタルとソグドの影響について

代表者・影山 悦子 基盤研究 (C) 継続

本研究は、従来の研究によって法隆寺・東大寺宝物に認められている「イラン文化」を再検討し、その影響の源がササン朝ペルシアだけではなく、エフタル支配地域やソグド人の文化にもある可能性を考察するものである。

最終年度である2016年度は、フランスとウズベキスタンにおいて本研究課題と関連のある遺物の調査をおこなった。また、エフタル支配期にソグドに入ったと考えられるインド美術の影響に関する論文を発表した。

◆律令制下の土器生産―須恵器・土師器群別分類の再構築

代表者・神野 恵 基盤研究 (C) 継続

2016年度は奈良山窯と陶邑窯から出土した須恵器について、記録用の実測図作成および写真撮影後、分析に供する試料の採取をおこなった。これら試料について研究協力者の降幡順子が蛍光X線分析をおこない、奈良山窯と陶邑窯出土須恵器について、産地同定の基礎的データの拡充をおこなった。また、かつて奈良文化財研究所が採集した生駒窯の須恵器資料についても、実測図作成を進めている。

さらに今年度は、湖西窯や美濃窯等畿内からみて東方の須恵器窯について、資料調査をおこなった。湖西窯の資料については、窯の表採試料から、分析に供する資料の提供を受けた。

◆奈良時代鉛釉陶器および鉛釉瓦磚の基礎的研究

代表者・今井 晃樹 基盤研究 (C) 継続

2016年度は昨年度に引き続き、関西地方の施釉陶器、瓦磚のデータベースを作成、平城宮・京出土の瓦磚について、釉薬および胎土の分析を実施した。また、平城宮出土の施釉陶器、瓦磚について考古学的観察や分布状況を分析した。その結果、奈良三彩陶器と施釉の瓦磚、「寺」や「仏所」と書いた墨書土器が、平城宮内で共存する率が高いことが判明した。奈良三彩陶器が仏器であり、施釉陶器が仏像を安置する須弥壇や仏座に使用したことを考え合わせると、奈良三彩陶器や施釉瓦磚の出土地点は平城宮内における仏教関連施設の存在を示唆する可能性が高いと考えるにいたった。

◆古代の灯火―先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究

代表者・深澤芳樹 基盤研究 (C) 継続

本研究では、光を生みだす人工的なしくみを照明具と呼ぶ。現代にいたるまでその多くは、有機成分が酸化したときにおきる発光現象を利用してきた。樹木を燃やす松明等、現代まで一貫してその主要なあり方であったらしい。しかしこれは野外においては有効であっても、室内では燃焼の持続時間と発光量、それに管理の問題から、不適当であった。飛鳥時代以降日本列島にあらわれる、植物油料を燃料にして、灯心で発光させる灯火器は、この問題を解決した。この実態を、2016年度は各地の研究者と意見交換をおこないながら、実物を観察して、追究した。

◆飛鳥時代金属製品の加工技術に関する基礎的研究

代表者・石橋茂登 基盤研究 (C) 継続

本研究は、奈良文化財研究所が所蔵・保管する金属製品を対象資料の核として、資料集成と観察にもとづく考古学的な検討、可能な限りの科学分析をおこない、飛鳥時代の金属製品加工技術に関する体系的な解明を目指して基礎的な整理と研究をおこなうものである。

2016年度は、山田寺跡出土押出仏・銅板五尊像の蛍光X線分析、川原寺跡出土椀管の鉛同位体比分析、飛鳥寺跡出土の耳環のX線透過撮影や蛍光X線分析、長法寺出土の押出三尊仏像の蛍光X線分析等を肉眼観察や写真撮影等とあわせて実施した。飛鳥寺跡の出土品については継続的に作業をおこなう予定としている。調査成果についてはとりまとめたものから奈文研紀要、論文等で公表する予定である。

◆「復元学」構築のための基礎的研究

代表者・海野 聡 挑戦的萌芽研究 継続

2016年度は、研究最終年度にあたり、復元学の構築に向けて、年度前半には、イギリスに赴き、西欧における史跡整備・復元の事例を調査した。また2016年6月18日(土)に第118回公開講演会として、奈良文化財研究所講堂にて復元学に関する講演会を開催し、復元学の成果を公表した。

年度の後半には、これまでの研究成果を活かしつつ、一般向けに復元の背景を紹介する『古建築を復元する一過去と現在の架け橋』(吉川弘文館、2017年2月)を刊行し、成果報告として、各所に配布し、周知をはかった。

◆考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴地図の開発

代表者・村田 泰輔 挑戦的萌芽研究 継続

2015年度に採択された本研究は2年目となった。今年度は昨年度から進めているデータ構成をさらに精査することにより、データベース入力項目と形式について決定し、約1万2千件のデータを入力し、データ表示等のデータベースの動作試験に取り組んでいる。さらに基本層序、災害痕跡層位、発掘調査区といった地点情報を基盤に、「表層地質断面図」の作成に取り組んでおり、その成果をデータベース上に取り込む作業に入っている。また研究協力者である関口洋美准教授（大分県立芸術文化短大）と共に、データベース活用効果評価のための質問紙の作成を開始し、2017年度での実施を目指す。

◆鉛釉陶器の鉛同位体比值と金属元素の価数から考察する生産地と焼成技術の特徴

代表者 降幡 順子 基盤研究 (C) 新規

本研究は鉛釉陶器のなかで鉄分の多い粘土を用いた白色軟質胎土の焼成技術の特徴と系譜について究明することを目的とする。2016年度は化学組成を事前に調査し、鉄含有量が1%～7%の胎土約50点について、SPring-8のBL01B1ラインで鉄の価数を測定した。その結果、鉄の価数と含有量の相関の有無が、硬質胎土と軟質胎土により異なることがわかった。さらに平城京内の寺院出土の緑釉瓦については胎土分析および鉛同位体比分析による鉛原料産地の推定を行い、8世紀の集中領域内に分布することを確認した。

◆埋蔵環境下における金属製遺物の現地保存法の開発

代表者・脇谷 草一郎 基盤研究 (C) 新規

本研究では、1) 熱・水分・物質移動の数値解析から遺跡地盤内部の温度、含水率、酸化還元環境、すなわち遺物の埋蔵環境を推定するモデルの構築と、2) 様々な含水率、酸化還元環境下での金属の腐食速度を室内実験から定量化することで、埋蔵環境下での金属製遺物の腐食速度のモデル化を試みる。構築されたモデルから、遺跡地盤内部あるいは古墳の石室内に埋蔵された状態にある金属製遺物について、1) 現状の埋蔵環境下での腐食速度を推定し、さらに2) 地表面の改良等の軽微な変更によって、埋蔵環境を改善する手法を検討する。

◆蛍光X線分析と鉱物組成分析による飛鳥藤原地域出土古代瓦の生産・供給体制の研究

代表者・清野 孝之 基盤研究 (C) 新規

本研究は、飛鳥藤原地域出土瓦と同範または深い関わりが推定される瓦等について、理化学的分析（蛍光X線分析、鉱物組成分析）、考古学的調査をあわせておこない、その生産と供給の実態をあきらかにしようとするものである。2016～18年度の研究期間の初年度に当たる今年度は、奈良文化財研究所および他機関が所蔵する軒瓦等の調査に向けた準備をおこなった。また、藤原宮出土瓦と同範であることが確認されている滋賀県大津市石山国分遺跡出土の軒丸瓦3種（6278D・F・G）、軒平瓦2種（6646A・Ba）等の調査をおこない、藤原宮所用瓦の生産の様相を把握するための手がかりを得た。

◆6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究—奈良盆地を中心に—

代表者・廣瀬 覚 基盤研究 (C) 新規

本研究は、律令国家成立以前の支配制度のひとつであり、従来は文献史学を中心に研究がなされてきた「部民制」について、近年、飛躍的に深化している埴輪生産組織の復元研究にもとづいて、考古学からその実態をあきらかにすることを目的とする。

初年度となる2016年は、奈良盆地およびその周辺地域を対象に、6世紀代の埴輪出土遺跡の文献収集をおこなった。また、本研究が所蔵の木津川市音乗谷古墳出土埴輪を用いて三次元計測による埴輪のデータ化試験を実施した。同一個体の埴輪に対し、従来型のレーザースキャン（コニカミノルタ製VIVID990）による方法と、Agisoft社のPhotocan Proを利用したSfM-MVSによる方法とを比較した結果、両者から作成した三次元モデルにはほとんど誤差がなく、モデルから抽出したハケメパターンにおいてもマッチングが可能であることを確認した。次年度以降の分析では、作業効率の高い後者を用いて、大量の埴輪を計測・分析していく予定である。

◆明治～戦前期の木造建築に使われた良材の産地とその年輪データに関する基礎的研究

代表者・藤井 裕之 基盤研究 (C) 新規

東北大学との共同研究。わが国の年輪年代法の大きな弱みは、既存のデータが中部～東日本系に偏り過ぎており、しかも新しい時代ほど蓄積が乏しい点にある。本研究は、さきにツガの年輪に関する研究を通して得られた知見を発展させ、年輪研究にも

適した良材が数多く使われた近代の建物に注目し、対象樹種を広げてその年輪データを全国的に収集しようとする。個別建物の年代や用材の流通実態の解明もさることながら、年輪年代法自体の体質改善こそが大きな目的である。これにより西日本方面のデータを充実させ、来たる産地研究に道筋をつけたい。4ヵ年計画の初年度は資源配分の都合上事前準備のみとし、調査用共通機材の購入と実地テスト、および調査方針の討議と確認をおこなった。

◆日本と中国における古建築用語の相互訳および英訳を通じた比較研究手法の創生

代表者・鈴木 智大 挑戦的萌芽研究 新規

本研究は、日本と中国の木造建築に関する用語の比較を通して、東アジアにおける建築文化の特質を見出す研究手法の創生を目指す。

両国の古建築用語の相互訳をおこなうことで、共通点および各国の特質を見出し、さらに英語訳をおこなうことで、用語の持つ意味を客観的に評価する。さらに、翻訳を通じた問題意識の形成・蓄積を通じて、論点を抽出する。

初年度となる2016年度は、中国の建築用語の系統的な把握をおこない、その日本語訳を検討した。また日本の建築用語の英訳について、整理をおこなった。

◆東アジアにおける「西のガラス」の流通からみた古代の物流に関する考古学的研究

代表者・田村 朋美 若手研究 (A) 継続

本研究は、化学分析を通して、日本列島の遺跡から出土する「西のガラス」の生産地を推定し、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易ルートの解明と、その時期変遷をあきらかにすることを目的とする。2016年度は、西アジア周辺で生産されたと考えられている植物灰ガラスについて集中的に調査した。その結果、日本列島でもっとも出土量の多いGroup SⅢBの植物灰ガラスは、地中海世界に特有のナトロンガラスが混合されている可能性が高いことがあきらかとなった。さらに、重層ガラス玉や多面体玉のような特殊なガラス玉類についても、種類ごとに材質的傾向が異なることが確認された。

◆古代東アジアにおける建築技術の重層性と日本建築の特質

代表者・海野 聡 若手研究 (A) 継続

東アジアにおける古代建築の関連性をあきらかにし、日本建築の特質を検討する研

究の3年度目にあたる。

9月には中国山西省における現地調査をおこなった。なかでも、日本の倉庫建築にみられる妻梁や組物に着目し、日本と中国の建築の比較をおこなった。

また研究の基礎となる日本の古代における建造物の基本的な構成を整理した内容を『古建築を復元する一過去と現在の架け橋』（吉川弘文館、2017年2月）を刊行することで公開した。

◆日本考古学国際化のための考古学関係用語シソーラス構築と自動英語化の研究

代表者・高田 祐一 若手 (A) 新規

本研究は、考古学関係用語シソーラスおよび考古学関係用語の日英対訳データベースを構築し、全国の発掘報告書の全文データを格納している「全国遺跡報告総覧」システムを拡張開発することで日本考古学の国際化に資することを目的とする。

2016年度は、基本的な考古学用語シソーラスおよび日英対訳を作成し、英語自動検索機能を開発し公開した。この機能によって海外からのアクセスが増加した。

◆対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究

代表者・丹羽 崇史 若手研究 (A) 新規

本研究は異なった条件（原素材・鑄型構造等）で実験鑄造した試料どうしを比較検討する「対照実験」の手法を主軸として、殷周青銅器を中心とした古代東アジアの鑄造技術の解明に取り組むものである。

初年度の2016年度は、出土青銅器・鑄型等関連資料の集積を進めた。また、国内機関のほか、中華人民共和国、米国、大韓民国、台湾に出張し、各機関の所蔵資料の調査をおこなった。研究協力者とは随時協議を進め、これらの成果をもとに富山大学、芦屋釜の里にて鑄造実験を実施した。なお成果の一端は、首届中国考古学大会（2016年5月22日・鄭州）、SEAA7（6月11日・ボストン）、WAC8（8月29日・京都）、第172回講演大会「鉄の技術と歴史」研究フォーラム（9月22日・大阪）、国際会議「商周青銅器及鑄造工藝研究」（11月4日・香港）にて報告した。

◆中近世日本と東アジアにおける木造建築の変革に関する比較研究

代表者・鈴木 智大 若手研究 (A) 新規

本研究は、東アジア木造建築史の構築に向けた研究構想の一環として、東アジア各国の木造建築を、社会的・技術的・自然環境的な側面から比較研究するものである。

初年度となる2016年度は、中国元代にお

ける繫貫の発生とその後の展開をあきらかにしたうえで、近世初頭の日本の寺院建築と比較考察した。その一部は、Tomohiro Suzuki “What Did Chinese Chuanchang Influence the Timber Architecture of East Asia” ISAA2016、としてまとめた。さらに、上記の変革の地域的な広がりを検証するため、17～19世紀の台湾の木造建築について現地調査した。

また、国際研究会として、第1回東アジア木造建築史研究会を主催し、日本・中国・韓国における最新の研究成果の共有をはかった。

◆古代東アジアにおける食器構成と食事作法の変化に関する比較研究

代表者・小田 裕樹 若手研究 (B) 継続

本研究は、飛鳥時代後半から奈良時代に見られる「律令的土器様式」の成立・展開とその歴史的背景について、東アジア諸国における食器構成と食事作法の変化との比較という観点からあきらかにすることを目的とする。

研究最終年度にあたる2016年度は研究の総括をおこなった。古代日本の食器構成の変化は基層となる日本列島の伝統的食事様式を前提として、東アジアに共通する大陸の食事様式を受容し、変容する過程として捉えることができる。この変化は食器構成や食事作法等食事様式全般におよぶものであり、古代律令国家成立による社会・文化変容の一端を物語る。

これらの成果を学術論文として公表した（小田裕樹2016「古代宮都とその周辺の土器様相」『官衙・集落と土器2』ほか）。

◆古代日本の宮都、寺院出土磚の基礎的研究

代表者・中川 二美 若手研究 (B) 継続

本研究は磚の生産から、古代社会の手工業生産体制の一端をあきらかにすること、特に生産地と消費地の関係性をあきらかにすることが目的である。

2016年度は複数の磚で一つの大きな文様を構成する施釉磚を中心に検討をおこなった。出土資料は限られているが、使用された須弥壇の規模の想定復元までおこなうことができた。またこの検討により、使用場所での企画や設計を十分に理解した上で、それに見合った施釉磚が生産されている状況をうかがい知ることができた。

◆大工道具とその加工痕跡から見た建築技術史の研究

代表者・番 光 若手研究 (B) 継続

本研究は、大工道具の伝世品資料および

建築部材に残された加工痕跡から、近世以前の木造建築および部材加工技術の特質についてあきらかにしようとするものである。

2016年度は大工道具の伝世品資料の調査をおこなった。藤井家田蔵大工道具について防府市教育委員会より資料提供を受け、近世・近代の他の伝製品大工道具一式との比較検討をおこない、これまでの調査成果を整理した。

◆重要文化的景観の評価方法と保護手法における現状と課題

代表者・恵谷 浩子 若手研究 (B) 継続

2016年度は、昨年度までの検討の結果を、平成28年度日本造園学会全国大会にて「文化的景観研究1－日本における文化的景観の20年」として発表をおこなった。

◆近世庭園の様式と地域性に関する基礎的研究－重森編年への検証として

代表者・高橋 知奈津 若手研究 (B) 継続

本研究は、安土桃山時代から江戸時代の寺院や邸宅の庭園を対象に、その構成要素や様式的特徴について詳細に整理・分析することにより、先行の様式編年研究を検証することを目的とする。

2016年度は、対象事例の整理・分析を進めた。（5月より産休のため中断）

◆古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造にかんする考古学的研究

代表者・諫早 直人 若手研究 (B) 継続

本研究は5・6世紀を中心に東北アジア各地の金工品について調査をおこない、各地の生産体制を復元するとともに、それらを相互に比較することで古代東アジア世界における金工品の生産と流通の実態をあきらかにすることを目的とする。

2016年度はその3年目にあたり、5世紀の新羅の王陵級古墳である慶州金冠塚出土金工品や東京国立博物館小倉コレクション等を調査し、新羅・加耶の金銅製品の生産体制の展開について検討を深めた。また初年度からひき続き飛鳥寺塔心礎埋納品を資料化しており、今年度は刀子について報告をおこなった。

◆七世紀土器編年からみた古代宮都の変遷に関する考古学的研究

代表者・若杉 智宏 若手研究 (B) 継続

本研究は、飛鳥地域出土の土器と難波地域出土の土器の比較から、7世紀半ば以降の宮都の変遷過程を再検討することを目的とする。

4カ年計画の3年目にあたる2016年度

は、昨年度に引き続き飛鳥編年の基準資料である坂田寺池SG100出土土器の再整理作業（実測・法量計測等）を進めた。

また、7世紀代の土器生産地の様相把握のため、湖西窯跡群出土資料、美濃須衛窯出土資料の実見調査をおこなった。

◆九州旧石器編年の再構築と集団関係の研究—中九州石器群の再検討

代表者・芝康次郎 若手研究(B) 継続

九州の旧石器時代編年は、その南北で異なる。この違いを、両地域の間にある中九州の石器群を詳細に検討し、他地域と比較することで埋めようとするのが、本研究で主眼である。本年実施予定であった熊本県西原村河原第6遺跡の発掘調査は熊本地震の影響により延期した。そのため、阿蘇周辺遺跡において在野の研究者により過去採集された旧石器の悉皆整理をおこなった。また原産地と消費地との関係解明を目指した調査を進めた。この一環として黒曜石原礫形状に着目し、これと石器技術を総合化した行動論的考察をおこない、阿蘇周辺石器群の特徴的な石材利用をあきらかにした（『九州旧石器』20号に発表）。

◆古代都城造営における造瓦体制の復元的研究

代表者・石田 由紀子 若手研究(B) 継続

本研究は、古代都城造営における物資の生産・供給に関するシステムの一端を、瓦を通して解明するものである。2016年度は、藤原宮所用瓦について、軒瓦だけでなく丸瓦・平瓦を含めた製作技法の特徴について、瓦窯ごとに再整理した。加えて、藤原宮出土瓦について各瓦窯の出土量に関するデータを収集し、大和の瓦窯と大和国外の瓦窯との生産量の違いについても検討をおこなった。これらの成果については、2017年刊行予定の早稲田大学考古学会誌『古代』特集号において公表する。

◆荘厳化を目的とした建築装飾に関する研究

代表者・大林 潤 若手研究(B) 継続

本研究は、寺院建築を中心とした宗教建築における荘厳化を目的とした装飾について、各建築における荘厳化の内容を解明することを目的とする。2016年は奈良県下の建築について修理工事報告書を中心に装飾要素の確認できる文化財建造物の事例を収集し、図面・写真をまとめたデータベースの作成をおこなった。また、装飾に関する文献・論文等の収集をおこなった。

◆文化遺産のデジタルドキュメンテーションとこれを活用した景観考古学の展開

代表者・山口 欧志 若手研究(B) 転入

本研究の目的は、文化遺産のデジタルドキュメンテーション方法の確立と、これを活用した景観考古学の展開である。そのために、考古資料を中心とする文化遺産のデジタルドキュメンテーション方法の確立、文化遺産のデジタル資料を活用した景観考古学研究の深化、文化遺産のデジタルドキュメンテーション方法の伝達と活用に取り組んだ。

研究は、日本・モンゴル国・ウズベキスタン共和国で発掘調査や3次元計測を実施し、古代から中世に至る様々な文化遺産のデジタルドキュメンテーションとその活用を推進した。これらの研究成果は学会やワークショップ、公開講演会等で発表した。

◆古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

代表者・山崎 健 若手研究(B) 継続

本研究の目的は、遺跡から出土した食料残渣から、古代における食生活をあきらかにすることである。

2016年度は、古代に加えて、古墳時代の遺跡から出土した動物遺存体について集積を進めた。そして、考古資料と文字資料を比較検討することにより、古代には貝類に大きな価値の差異が認められ、「中央へ貢進するための採貝活動」と「地で流通・消費するための採貝活動」を分けて議論できる可能性を指摘した。

こうした成果については、近江貝塚研究会第273回例会において「動物遺存体からみた古代の食」、条里制・古代都市研究会第33回大会において「馬の貢進・貝の貢進」と題する口頭発表をおこなった。

◆中近世における標準年輪曲線の広域ネットワーク整備による木材産地推定

代表者・星野 安治 若手研究(B) 継続

本研究では、これまで構築した標準年輪曲線ネットワークについて、その空白域である近畿以西の西日本にも拡張し、標準年輪曲線ネットワークの地域区分を日本の全域についてあきらかにすることで、年輪年代学的手法による木材産地推定をわが国で応用することを目的とする。研究3年目にあたる2016年度は、前年度から調査に入った日本海地域の代表となると考えられる鳥取での木製遺物、建造物古材の調査、および年輪幅計測に加え地域標準年輪曲線の構築に向けた検討をおこなった。今後、各地域ごとの標準年輪曲線を地域間で比較し、年輪変動の地域特殊性を見出すことで、年

輪年代学による産地推定を進める予定である。

◆水蒸気移動を用いた出土鉄製文化財の新規脱塩法の開発

代表者・柳田 明進 若手研究(B) 転入

本研究は保管時に腐食が生じる鉄製遺物に対して安定化処置として実施されている脱塩において、水蒸気移動を利用した従来法に比べて効果が高く、鉄製遺物へのストレスが大幅に軽減される新規法の開発を目的としている。2016年度は腐食性を有する鉄製遺物を模した試料による基礎実験を実施し、遺物内部の塩化物塩を潮解させる際の最適条件を検討するとともに、処置中および処置後の腐食抑制の効果を定量的に評価した。その結果、水蒸気移動を利用する新規脱塩法は従来法に比べて短時間で効果が得られるとともに、処置中の腐食が極めて緩慢であることが示された。

◆金工品の流通と製作技術伝播からみた古代東アジアにおける地域間交流研究

代表者・金 宇大 若手研究(B) 継続

2年目となる2016年度は、昨年度までに進めてきた垂飾付耳飾と装飾付大刀の検討にもつぎ、古代朝鮮諸国および倭の相互交流に関する見解を書籍化して、京都大学学術出版会から刊行した（『金工品から読む古代朝鮮と倭』）。また2016年度からは、獅嚙環頭大刀等、それまであまり検討対象としていなかった器種に分析の幅を広げ、本格的な資料集成に着手、一部の実見調査を開始した。いっぽうで、既存資料の再検討報告にも取り組み、京都府穀塚古墳出土環頭大刀の資料紹介等、倭の対外関係に関わる重要資料の詳細情報を学界に公表した。

◆財政関係木簡による古代地方社会の実態解明

代表者・山本 祥隆 若手研究(B) 新規

本研究は、地方官衙遺跡で多く出土する財政関係木簡等の総合的な検討により、古代国家の支配システムとその運用の具体像を財政史的観点から構築するとともに、文献史料だけではうかがえない古代地方社会の実態に迫ることを目的とする。

初年度にあたる2016年度は、新たに発見された東京国立博物館蔵・法隆寺献納宝物内の7世紀の木簡や、青谷横木遺跡をはじめとする鳥取県内各遺跡出土の古代木簡について現地を熟覧調査し、また出土遺跡の実地調査をおこなった。さらに、関係資料収集等の基礎的な作業を進めた。

◆古代都城における木器生産に関する基礎的研究

代表者・浦 蓉子 若手研究 (B) 新規

本研究は、人為的な加工が残る木材や樹皮等の植物質遺物から都城における木器工房や手工業の在り方を体系的に整理し理解することである。2016年度は、木器加工段階の木屑に焦点を当て、木屑の分類・報告例がある長野県屋代遺跡群や、静岡県伊場遺跡、宮城県市川橋遺跡等の出土品を調査し、類例の蓄積をおこなった。

◆二階建ての御殿にみる近世武家住宅の実体と空間の構成

代表者・大橋 正浩 若手研究 (B) 新規

本研究は、江戸時代に建てられた武家住宅のうち、主人の家族の居住、私的な対面、饗応等に用いられた二階建ての御殿に注目し、平面、部屋名、一階と二階の位置関係、意匠等にみる建物の実体と、居住者とその生活領域等にみる利用の実態から、二階建て御殿の建築的な空間構成についてあきらかにしようとするものである。

2016年度は、名古屋市蓬左文庫において、名古屋城御深井丸新御殿の平面図が描かれた絵図史料等の収集と整理をおこなった。

調査成果については、日本建築学会の大会および支部研究集会等で発表する予定である。

◆北陸地方の温泉地における共同浴場の建築史的研究

代表者・福嶋 啓人 若手研究 (B) 新規

本研究は、江戸時代の加賀藩領である石川県と富山県を一定の圏域とした北陸地方を対象として、温泉地の共同浴場に関する建築構造や意匠、技術、材料の歴史の変遷をあきらかにすることを目的とし、加えて共同浴場建築から広く建築史全体に眼を向け、建築の一端を把握することを目指している。初年度である2016年度は対象7カ所の温泉地の共同浴場に関する絵図資料や文献資料の収集をおこない、各々の建築的変遷を把握した。併せて絵図や図面資料をもとに、CADによる図面化を進め、共同浴場建築に関する基礎資料の作成に取り組んでいる。

◆大工道具にみる東アジア木造建築技術史の基盤構築

代表者・李 暉 若手研究 (B) 新規

本研究は、中国と日本の伝統的大工道具の調査を通して、古代建築造営の技術を追求するものである。初年度となる2016年度は、民俗学等周辺分野の大工道具に関す

る文献資料を収集した。ついで、日本建築学会大会（九州）および第11回アジアの建築交流国際シンポジウムにおいて、大工技術に関連する屋根修理と柱の修理に関する研究成果を発表した。また、次年度予定している中国の浙江省における調査について、関連資料を収集・整理するとともに、伝統的大工道具の所有者に調査の許可をとる等調整をはかった。

◆地理情報システムを用いた古代日本における移動コスト算出の基礎的研究

代表者・清野 陽一 若手研究 (B) 新規

本研究の目的は、地理情報システム (GIS) を用いた古代日本における人間の移動時間（およびそれによって表現される移動コスト）の最適な計算条件（パラメータ）を、各種歴史的史料を分析することで解明することである。多くのGISで用いられる移動コスト計算のパラメータは海外の近現代のデータにもとづくことが多いため、実際の古代日本に関する史料を分析し、当時の妥当な移動コストが算出できるようにすることが目的である。

初年度の2016年は研究環境整備と各種史料の所在確認と整理をし、次年度以降の具体的な分析作業に備えた。

◆マルチチャンネル機器を利用した高速遺跡探査技術の開発

代表者・金田 明大 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

探査技術の利活用の展開を目的として、探査の考古学的、埋蔵文化財保護への活用が進んでいる欧州の実態を調査した。研究受入れのヨーク大学に滞在し、探査をはじめとする考古学情報の取得と流通に関する動向について研究と議論をおこなった。また、周辺各国で施設や研究体制の見学や機器の試験をおこない、フランスでは日本の調査と技術利用の実態について講演をおこなった。

◆出土遺物を主とする赤外線撮影の高精度化に関する研究 ～光源と撮影機材のマッチング～

代表者・栗山 雅夫 奨励研究 新規

本研究は、木簡等出土品や棟札等伝世品の墨書文字資料について、光源と撮影機材のマッチングを検証し、画像の鮮鋭性向上と確実に簡便な撮影手法の両立を目的とする。

具体的には保存処理済と水漬保管の木簡、文字が判読しづらい中世の制札を対象とし、ストロボとLED赤外線投光器による光源差異、汎用品と特注フィルターの差

異を検証した。撮影はライブビューピント調整と赤外線撮影が可能な中判デジタルカメラを使用し、可視光と赤外線の連続撮影法も検討した。

この結果、LED赤外線投光器を光源とした際の解像性が優れていることを実証できたが、一定の大きさを越える被写体への対応が課題である。フィルターについては汎用品でも実用に耐えることを確認し、光源も含め廉価なものを組み合わせても従来を上回る精度を確保できる見通しを得た。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2016年7月1・2日、第7回（通算28回）文化財写真技術研究会の総会と研究集会を、平城宮跡資料館講堂において開催した。

1日目は総会と講演を実施した。講演は、長年奈良文化財研究所において、写真業務に携わっておられた井上直夫会長による「飛鳥の文化財を撮る眼」。井上氏が撮影した1970年代以降の写真は、会誌にも掲載され、近年の文化財写真の歩みを回顧する機会となった。

2日目は、午前各社の担当者による「メーカーに聞く～最新カメラ・機材の技術的特徴～」と題した機材展示発表をおこなった。午後は特集「写真を活用した新しい技術」と題して、下記の発表6本をおこなった。「SfMによる文化財の計測」（山口欧志）、「石造文化財へのSfMの活用と可能性～三次元計測と写真～」(永見秀徳氏；筑後市教育委員会)、「SfMによる過去の写真測量データの再構築」（三井猛氏；三井考測）、「SfMを活用した風食木簡墨痕明瞭化の研究」（中村一郎）、「東大寺東塔現場における産業ヘリ空撮」（今井純郎氏；ヤマハ発動機・南部裕樹氏；東大寺）、「Wi-Fiを利用したリモート撮影事例～中判高所撮影とコンデジ狭所撮影～」(栗山雅夫)。要約すれば、SfM/MVSやWi-Fiといったデジタル化によって出現した新しい技術に対して、撮影目的を見極めカメラの機能を活かしながら応用することで文化財写真の可能性が広がることを知る機会となった。

例年どおり、特集内容等を掲載した会誌『文化財写真研究』VOL.7を刊行したほか、飛鳥資料館春期特別展「文化財を撮る一写真が遺す歴史」の後援に加わり、会期を研究集会翌日まで設定していただきタイアップをはかった。（栗山 雅夫）

◆庭園の歴史に関する研究会

2016年11月27日に、平城宮跡資料館小講堂において庭園の歴史に関する研究会を開催した。2016年度から5カ年は近世庭園の歴史に関する研究会を開催するが、初年度の2016年度は「織豊期～江戸時代初期の庭園」を対象とした。発表者と内容は、高橋方紀氏（岐阜市）「岐阜城跡織田信長居館とフロイスの記録」、松尾法博氏（佐賀県立名護屋城博物館）「肥前名護屋城の数寄空間－特別史跡名護屋城跡と陣屋跡の庭園－」、小野健吉氏（和歌山大学）「安土桃山時代庭園の位置づけと意義」、加藤悠希氏（九州大学）「大工資料からみた織豊建築像」、河内将芳氏（奈良大学）「織豊期の文化と庭園」であり、総合討議をおこなった。（内田 和伸）

◆木簡学会研究集会

2016年12月3・4日、第38回木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した（参加者151名）。

3日は、三田寛之氏（東京国立博物館）「法隆寺献納宝物の幡と木簡について」、星野安治・浦蓉子・山本祥隆「年輪年代学的手法による木簡研究の可能性」、山下秀樹氏（奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所）・吉川聡「生駒長福寺本堂と木札の調査」の3本、4日は、桑田訓也「2016年全国出土の木簡」、吉野武氏（宮城県多賀城跡調査研究所）「多賀城跡の最近の調査と出土木簡」、梅村大輔氏（鳥取県埋蔵文化財センター）「青谷横木遺跡の発掘調査と出土文字資料（続々報）」の3本の報告があった。今回も各調査機関のご協力を得て木簡の実物展示をおこない、木簡観察をふまえた活発な議論に資することができた。

なお、会誌『木簡研究』第38号を編集・刊行した（編集担当：馬場基）。

（渡辺 晃宏）

◆東アジア木造建築史研究会

2017年2月11日、平城宮跡資料館小講堂において、第1回東アジア木造建築史研究会を開催した（参加者17名）。東アジア木造建築史の構築を目的とした国際研究会で、プログラムは以下の通りである。

司会：鈴木智大、通訳（日中）：李暉

Session1 韓国、発表：金碩顯氏（東北大学）「虚梁から見た高麗時代末・朝鮮時代初期における多包系建築の特質」、講評：韓志晩氏（韓国・明知大学校）

Session2 中国、発表：俞莉娜氏（早稲田大学）「中国宋金時代の磚室墓に見る倣木構造について－河南中北部、山西南部を中心に－」、講評：丁焄（中国・天津大学）

Session3 総合討論、コメント：加藤悠希氏（九州大学）

東アジア各国の最先端の研究成果の発表ののち、各国の建築史研究における位置づけに関して講評をおこなうことで、各国の建築史研究に対する相互理解を得ることができ、研究の手法や考察の視点等の詳細な検証、そして東アジアの比較研究の可能性の探求等、様々な観点から活発な議論を展開することができた。

なお、本研究会はJSPS科研費16H06113（研究代表者：鈴木智大、研究協力者：韓志晩、丁焄、李暉）の成果の一部である。（鈴木 智大）

◆条里制・古代都市研究会

2017年3月4・5日に、平城宮跡資料館講堂において、第33回条里制・古代都市研究会を開催した。今回は、「古代都市と動物」をテーマとして、4日は山崎健「馬の貢進・貝の貢進」、丸山真史氏「平安時代の都市における動物利用」、山近久美子氏「歴史地理学からみた動物と都市「空間」」、馬場基「史料からみた古代都市と動物」の4本の研究報告と活発な質疑応答が交わされた。5日は調査レポートとして、山本亮「藤原京右京八条二・三坊、九条二・三坊」、滝沢匡氏「多胡郡正倉跡の発掘調査成果について」、猪狩俊哉氏「長寿山遺跡－常陸国多珂郡藻島駅家推定遺跡の調査成果－」、坂本嘉和氏「青谷横木遺跡の道路遺構と条里地割」、堀内和宏氏「竹松遺跡の調査と周辺条里」の各報告があり、質疑応答がおこなわれた。参加者は114名であった。（小田 裕樹）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備

2015年度に引きつづき、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門の見地からの助言をおこなった。

平城宮跡南辺の二条大路および史跡朱雀大路地区では、国土交通省による当該地区整備のための基礎資料を得る目的で、数カ所の発掘調査をおこなった（第566・576～578次）。詳細については『奈文研紀要2017』を参照されたい。そのほか、朱雀門南東の平城宮跡展示館建設地、第一次大極殿院の復元工事に向けての、同院地区内での仮設建物建設地等に対して、立会調査で対応し、遺構の保護を確認した。

いっぽう、文化庁が計画した東院南方地

区における用水路への転落防止柵設置および、造酒司から東院南方地区への防犯施設設置工事等に対して、やはり立会調査で対応した。

2010年度から進めている第一次大極殿院の復元研究は、今年度は南門の飾金具を中心とする検討を進め、所内検討会を1回、有識者会議を2回開催した。所内検討会は全国の官衙や国分寺等から出土した資料収集を2015年度から継続しておこない、ほぼ主要な出土建築飾金具を収集した。結果的には、復元の参考となりそうな金具は、畿内の寺院が中心であることを改めて確認することができた。また、金具の意匠の復元には、その製造技法が密接に関係していると考えられたため、成分分析等をおこなったが、さらなる出土遺物の観察をおこなう必要があるとの認識にいたった。意匠の検討の詳細については、『奈文研紀要2017』を参照されたい。（箱崎 和久）



第一次大極殿院第1回金具検討会（2016年9月7日開催）

●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査

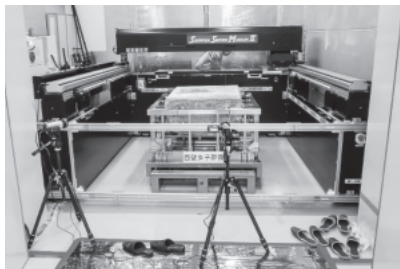
高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修復施設において、現在、クリーニング等の作業が実施されている。壁画の保存修復においては、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこない、材料、劣化状態および劣化原因に関する情報を得ることが重要である。

2016年度は漆喰層の劣化状態を把握するため、西壁1（西壁男子群像）と西壁2（白虎）のTHzイメージング調査を実施した。また、経年変化の記録撮影として、可視光線および赤外線を用いて東壁3石、西壁3石、ならびに天井石4石に対して、デジタルアーカイブスキャナによる高精細画像を撮影した。撮影は各石材漆喰面に対し、可視光と赤外光で実施した。継続して調査検討をおこなってきた紫外線を用いたスキャンニングについて、その適用の可否を検討した結果、壁画に致命的なダメージを与えることはないと判断されたことから、西壁3（女子群像）に対する紫外線スキャンニングを実施した。さらに、同時に紫外線

を用いた発光分光分析の可否を検討し、壁画に致命的なダメージを与えることはないと判断されたことから、来年度より、高松塚古墳壁画に対して、順次、分析に取り掛かることとしている。

昨年度に引き続き、可搬型X線回折装置の検討をおこなった。2016年度は、実験機を組み上げ、コリメータサイズによる分解能向上効果の実験的検証を実施した。

(高妻 洋成)



高松塚古墳壁画のデジタルアーカイブスキャニング

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係では、以下の事業を実施した。

遺物に関する事業では、骨片の仮保管ケース製作と仮強化処理を実施し、表面風化の顕著なガラス小玉資料に対して仮強化処理を実施した。

発掘調査成果の整理・活用にかかる事業としては、石室および仮設保護覆屋の3D測量データを用いてモデリング作業を実施し、デジタルデータを作成した。

2016年度は壁画の接合・修復作業が完了したため、これまで中断していた高精細カメラによる経年変化の記録撮影を、各面ともに実施した。

9月24日には、国営飛鳥歴史公園のキトラ古墳周辺地区が開園した。1階が文化庁の壁画保存管理施設で、そこに研究員が常駐して施設の日常管理および運営をおこなうとともに、壁画・出土遺物の展示公開をおこなった。壁画非公開期間は、展示室にて出土遺物等を公開し、パネル作成等の展示業務全般をおこなった。また、キトラ古墳および文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設を紹介するリーフレットを作成し、配



壁画保存管理施設での壁画の展示公開

布した。

古墳の活用にかかる事業としては、東京の多摩六都科学館の企画展関連講演会等で、4名が講演をおこなった。また、古墳現地に設置した乾拓板を活用して、壁画に関する講演会と乾拓体験教室をおこなった。

(玉田 芳英)

現地説明会・見学会

◆平成28年5月15日(日)

飛鳥藤原第187次調査(藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡)

発掘調査現地見学会

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

主任研究員 森川 実

研究員 前川 歩・清野 陽一

参加者1,753人 調査面積2019㎡

◆平成28年6月11日(土)

平城第566次調査(平城京朱雀大路・二条大路(右京三条一坊一坪・八坪))

発掘調査現地見学会

都城発掘調査部(平城地区)

研究員 番 光

参加者505人 調査面積684㎡

◆平成28年10月2日(日)

飛鳥藤原第189次(藤原宮朝堂院朝庭)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

研究員 大澤 正吾

参加者1,315人 調査面積870㎡

◆平成28年10月8日(土)

東大寺東塔院跡

発掘調査現地説明会

(東大寺・奈良県立橿原考古学研究所と共催)

都城発掘調査部(平城地区)

参加者1,125人 調査面積821㎡

◆平成29年1月28日(土)

飛鳥藤原第190次(藤原宮大極殿院)

発掘調査現地説明会

都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

研究員 和田 一之輔

参加者497人 調査面積480㎡



飛鳥藤原第190次調査 現地説明会

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2016年度は、専門研修13課程と特別研修2課程を開催した。(2016年度文化財担当者研修課程の一覧参照)。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数85日、研修生総数167名であった。

各部・センターでは、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2016年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の遺跡探査、動物遺存分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として玉田芳英（考古学）、高妻洋成（保存科学）、尾野善裕（考古学）、馬場基（史料学）、山崎健（環境考古学）の5名がそれぞれの講義、演習および実習をおこなうとともに、文化遺産学分野を専攻する院生に対して必要に

応じて奈良文化財研究所において研究指導をおこなった。

2016年度には、修士課程4名、博士後期課程7名に加え、京都大学大学院総合生存学館（思修館）総合生存学専修博士一貫課程の2年次学生を研究生として受け入れ、研究指導をおこなった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教授として、杉山洋（歴史考古学特論）・小池伸彦（文化財学の諸問題）・渡辺晃宏（歴史資料論）が担当し、博士後期課程の大学院生への研究指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡等の遺跡や、そこから出土した埴塼や羽口、金属製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着したもので、大学における通常の授業では経験できない、奈良文化財研究所ならではの特色ある教育を実践した。

なお、これとは別に、博士前期課程の大学院生3名のインターンシップの受け入れをおこなった。

奈良大学への教育協力

昨年度に引き続き「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講した。遺跡等の保護と整備について、最新事例を紹介しながら体系的に講義をおこない、平城宮跡において学外授業を実施した。

2016年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

(青森) 三内丸山遺跡	園 慶雲館庭園 紫香楽宮跡 清水山城館跡	物群 荒神谷遺跡 益田氏城館遺跡群
(岩手) 御所野遺跡 鳥海柵跡	(京都) 宇治川太閤堤跡 恭仁宮跡 大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	(岡山) 備中松山城跡 高梁市伝統的建造物群
(宮城) 多賀城跡	(大阪) 百済寺跡 鳥坂寺跡 高安千塚古墳 古市古墳群 百舌鳥古墳群 飯盛城跡 二子塚古墳 難波宮跡 岸和田城庭園(八陣の庭)	津山市伝統的建造物群
(秋田) 脇本城跡 横手市伝統的建造物群	(兵庫) 赤穂城跡 古代官道	(広島) 廉塾ならびに菅茶山旧宅 甲立古墳
(福島) 宮畑遺跡 宮脇廃寺跡	(奈良) 中宮寺跡 菓山古墳 唐古・鍵遺跡 香芝市史跡 島の山古墳 橿原市伝統的建造物群 春日古墳 法隆寺金堂壁画	(山口) 周防鑄銭司跡 周防国分寺旧境内
(群馬) 金井東裏遺跡 上野国佐位郡正倉跡 上野国新田郡家跡	(和歌山) 紀伊山地の霊場と参詣道	(徳島) 勝瑞城館跡 阿波国分尼寺跡
(神奈川) 円覚寺庭園白鷺池 橘樹官衙遺跡群	(鳥取) 青谷上寺地遺跡 大高野官衙遺跡 米子城跡 斎尾廃寺跡	(香川) 快天山古墳 丸亀城跡 讃岐国府跡 丸亀市伝統的建造物群
(石川) 金沢城 真脇遺跡	(鳥根) 津和野町伝統的建造物群 出雲国府跡 三瓶小豆原埋没林 大田市伝統的建造	(愛媛) 永納山城跡
(福井) 朝倉氏遺跡 金ヶ崎城跡 兜山古墳		(福岡) 大宰府史跡 鴻臚館跡 須玖岡本遺跡
(岐阜) 正家廃寺跡 弥勒寺官衙遺跡群 岐阜城跡		(佐賀) 肥前陶器窯跡 三重津海軍所跡
(静岡) 新居関跡 遠江国分寺跡		(長崎) 鷹島海底遺跡
(愛知) 尾張国分寺跡		(熊本) 西南戦争遺跡
(三重) 長谷川家 松坂城跡 諸戸家住宅 諸戸氏庭園		(大分) 法鏡寺廃寺跡 長者屋敷官衙遺跡
(滋賀) 敏満寺石仏谷墓跡 日吉神社境内 胡宮神社社務所庭園 多賀大社奥書院庭		(宮崎) 日向国府跡 蓮ヶ池横穴群

2016年度 文化財担当者研修課程一覧

区分	課 程	実施期日	定員	対象	内 容	担当室	研修 日数	応募 者数	受講 者数
専 門 研 修	建築遺構 調査課程	6月6日 ～ 6月10日	8～ 15名	地域の中核となる 地方公共団体の 文化財担当職員 若しくはこれに 準ずる者	発掘調査で検出される建築遺構や出土建築部材に 関して、必要な上部構造の専門的知識や発掘方法 等についての研修。	遺構研究室	5日	4名	4名
	古文書歴史 資料調査 基礎課程	6月20日 ～ 6月24日	8～ 15名	〃	古文書・歴史資料の調査・管理等を担当する立場 にあるが、当該分野に関する専門的教育を受けた ことのない地方公共団体等の文化財担当者を対象 に、基礎的知識の習得を目指す研修。	歴史研究室	5日	23名	23名
	人骨・動物骨 調査課程	7月25日 ～ 7月29日	8～ 15名	〃	出土した人骨や動物骨の調査方法、整理作業、報 告書作成について、必要な専門知識と技術の習得 を目的とする研修。	環境考古学 研究室	5日	7名	7名
	地質考古 調査課程	8月29日 ～ 9月2日	8～ 15名	〃	遺跡等の発掘調査で必要とされる、地層・土層・ 土壌等に関する基礎的な専門知識・技術の習得を 目指す研修。	遺跡・調査 技術研究室	5日	17名	17名
	遺跡情報 記録調査 課程	9月6日 ～ 9月9日	8～ 15名	〃	遺跡・遺物の正確な記録とその保存活用手法とし て、GISやデータベースの利用、遺跡情報の公開に 関する知識の取得を目指す研修。	文化財情報 研究室	4日	5名	5名
	文化的景観 調査計画 課程	9月12日 ～ 9月16日	8～ 15名	〃	文化的景観の保護にこれから取り組む担当者を対 象に、文化的景観の歴史・概念、保護制度、調査 手法および保存計画立案等についての基礎知識を 習得することを目的とする研修。	景観研究室	5日	10名	10名
	地質・年代 調査課程	9月26日 ～ 9月30日	5～ 10名	〃	地層観察、年代測定試料の取扱い等の実習やその 活用に関する講義を通して、発掘調査に必要なと なる地質学や年代学の基礎的な知識の習得を目指す 研修。	年代学研究室	5日	3名	3名
	保存科学Ⅰ (金属製遺物) 課程	10月11日 ～ 10月19日	5～ 10名	〃	金属製遺物の材質および劣化状態に応じた保存処 理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができ るよう、金属製遺物の材質および保存処理に関す る基礎知識の習得を目的とする研修。	保存修復科学 研究室	7日	10名	10名
	土器・陶磁器 調査課程	11月14日 ～ 11月18日	8～ 15名	〃	報告書作成に向けて、日本の遺跡から出土する「や きもの(土器・陶磁器)」をいかに分類・整理する か。実物の観察を通して、製作技法を読み取ると 共に、時期・産地を推定する鑑識眼を養うための 研修。	考古第二 研究室	5日	16名	16名
	文化財写真 課程	11月28日 ～ 12月8日	8～ 15名	〃	文化財の記録の中核をなす記録写真撮影について、 様々な文化財分野の写真についての基礎知識と実 習による実技を習得できる研修。	写真室	9日	12名	12名
	報告書作成 課程	12月8日 ～ 12月16日	8～ 15名	〃	文化財調査報告書等の出版物制作に必要な編集と 印刷工程の基礎知識とともに、実際の編集作業に 必要な実践的な知識や技術、特にデジタル編集の ノウハウを実習を通じて学ぶ研修。	企画調整室	7日	19名	19名
	中近世城郭 調査整備 課程	1月16日 ～ 1月20日	8～ 15名	〃	中近世城郭跡の調査方法と石垣の解体修理等整備 方法について、座学と現地研修で基礎的な知識の 習得をめざす研修。	遺跡整備 研究室	5日	11名	11名
保存科学Ⅳ (遺構・石造 文化財)課程	2月13日 ～ 2月17日	5～ 10名	〃	史跡整備における遺構および石造文化財の保存に おいて、劣化の現状に関する知見、ならびに維持 管理に要する整備後のモニタリング調査と、その 結果にもとづく劣化発生の予測をおこなうための 劣化状態調査法および環境調査法に関する研修。	保存修復科学 研究室	5日	11名	11名	
特 別 研 修	デジタル 写真課程	3月7日 ～ 3月10日	8～ 15名	〃	フィルム写真記録からデジタル写真環境への移行 に対応するために必要な基礎的な知識、技術、設備、 文化財担当部局・担当者の考え方についての研修。	写真室	4日	13名	13名
	報告書公開 活用課程	3月13日 ～ 3月15日	8～ 15名	〃	文化財調査報告書等の電子化による公開活用につ いて、必要な専門知識と技術の習得を目的とする 研修。	文化財情報 研究室	3日	6名	6名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「文化財を撮る一写真が遺す歴史」

2016年4月26日～7月3日

文化財を守り伝えるうえで重要な役割を担っている文化財写真の歴史と技術に焦点をあてた展覧会。ライティング操作を体験できるコーナー等を設置した。会期中の入館者数9,974人。講演会「飛鳥の文化財を撮る眼」（講師：井上直夫、参加36名）、体験イベント「なりきりカメラマン—文化財写真技師の仕事体験」（参加21名）を開催。図録『文化財を撮る一写真が遺す歴史』刊行。



体験イベント「なりきりカメラマン」で参加者が撮影する様子

◆夏期企画展「第7回写真コンテスト「飛鳥の石」

2016年7月26日～9月4日

「飛鳥の石」をテーマに作品を募集し、175点を会場に展示。審査と来館者投票による上位者を表彰した。会期中の入館者数3,383人。入賞作品を配した地図を作成し会場で配布した。

◆秋期特別展「祈りをこめた小塔」

2016年10月7日～12月4日

百万塔と銭弘俵八万四千塔と泥塔を紹介する展覧会。会期中の入館者数9,373人。講演会「銭弘俵八万四千塔について」（服部敦子氏）、「データ分析からみた百万塔」（森本晋）を開催した（参加46名）。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2016 飛鳥むかしむかし 早川和子原画展」

2017年1月24日～3月20日

明日香村教育委員会との共催。早川和子氏による古代の復元画を多数展示。会期中の入館者数4,571人。早川氏によるギャラリートークと似顔絵描きのイベントを開催。図録『早川和子が描く 飛鳥むかしむかし』刊行。絵はがきも作成、販売した。

このほか、明日香村観光活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加し、夜間無料開館を実施した（2016年8月27、28日）。

平城宮跡資料館の展示

◆夏期企画展「ナント！ おいしい!? 平城京!! —奈良の都の食事情—」

2016年7月23日～8月31日

夏のこども展示。「役人も給食を食べていた」、「腐らず残った食べ残し」、「料理の味はどんな味」、「名物に歴史あり」、「スーパーで売っている食材は」という構成で平城京の住民の食生活に関する展示をおこなった。「食」という身近な話題だったうえ、意外と知らないことや、給食、物価、グルメ等、現代にも通じる点もあったので、こどもばかりでなく、おとなにも好評だった。会期中の入館者数9,532名、ギャラリートークを3回開催（参加者数62名）。

◆秋期特別展「地下の正倉院展 式部省木簡の世界 —役人の勤務評価と昇進—」

2016年10月15日～11月27日

地下の正倉院展。発見50周年の式部省木簡を取り上げた。その多くが、削りくずをガラス板に封入したプレパラート標本であったり、従来の覗きケースよりも木簡を見やすくすることを試みたりしたことから、特製ケースを製作して展示をおこなった。また、削りくずを意識した室内装飾をほどこして、従来の地下の正倉院展とは、趣のちがう展示となった。会期中の入館者数17,653名、ギャラリートークを3回（参加者数183名）開催。

このほか、春期企画展「発掘速報展 平城2016」（2017年2月4日～4月2日、入館者数13,585名）をおこなった。



「地下の正倉院展」ギャラリートークの様子

2016年度 入館者数

飛鳥資料館（有料） 観覧料の詳細は69頁	平城宮跡資料館（無料）	合 計
35,970人	102,053人	138,023人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して、平城宮跡への理解を深めていただけるよう案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2017年3月31日現在、所定の研修を受けた解説ボラ

ンティアの登録数は124名を数え、平均して一人当たり1ヶ月に2～3日のガイド活動をおこなっている。

2016年度における活動については、定点5カ所の解説を中心に、事前予約による宮跡内ツアーガイドを充実させた。



2016年度「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数 309日間）

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	計	
17,344人	20,222人	6,755人	14,596人	5,942人	5,473人	70,332人	3,572人

*活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2017.3.31 現在

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の書籍および写真資料を収集している。また、仮庁舎図書資料室においても一般公開施設として位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスを実施している。

また、奈文研の刊行物についても、主要なものについてPDF化をおこない、学術情報リポジトリとしてインターネットを通じて公開している。

なお、一昨年度より公開を開始した全国遺跡報告総覧のアクセス数が、特に顕著な数値を示している。2017年度には全国展開を予定しているため、さらなる需要が見込まれる。

公開データベース一覧	2016年度 アクセス件数
木簡データベース	29,565
木簡画像データベース〔木簡字典〕	39,467
木簡画像データベース〔木簡字典〕〈韓国語版〉	994
木簡画像データベース〔木簡字典〕〈中国語版〉	1,824
木簡画像データベース〔木簡字典〕〈英語〉	1,227
木簡字典／電子くずし字典連携検索	272,853
木簡・くずし字解読システム-MOJIZO-	325,852
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	716
墨書土器画像データベース〔墨書土器字典〕	1,692
和同開珎出土遺跡データベース	234
平城京出土陶硯データベース	398
遺跡データベース	7,328
地方官衙関係遺跡データベース	1,534
古代寺院遺跡データベース	2,553
官衙関係遺跡整備データベース	302
古代地名検索システム	11,649
遺跡の斜面保護データベース	215
発掘庭園データベース	2,169
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	640
薬師寺典籍文書データベース	612
大宮家文書データベース	241
所蔵図書データベース	22,190
報告書抄録データベース	5,952
全国遺跡報告総覧	3,419,545
考古関連雑誌論文情報補完データベース	3,361
学術情報リポジトリ	53,878

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所 学報

- 第1冊 仏師運慶の研究 (1954)
 第2冊 修学院離宮の復元的研究 (1954)
 第3冊 文化史論叢 (1954)
 第4冊 奈良時代僧房の研究 (1957)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告 (1958)
 第6冊 中世庭園文化史 (1959)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告 (1959)
 第8冊 文化史論叢 I (1960)
 第9冊 川原寺発掘調査報告 (1960)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 (1961)
 第11冊 院の御所と御堂—院家建築の研究— (1962)
 第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶 (1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察 (1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究 (1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告 II
官衙地域の調査 (1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告 III
内裏地域の調査 (1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告 IV
官衙地域の調査 (1966)
 第18冊 小堀遠州の作事 (1966)
 第19冊 藤原氏の氏家とその院家 (1968)
 第20冊 名物烈の成立 (1970)
 第21冊 研究論集 I (1972)
 第22冊 研究論集 II (1974)
 第23冊 平城宮発掘調査報告 VI
平城京左京一条三坊の調査 (1975)
 第24冊 高山一町並調査報告— (1975)
 第25冊 平城京左京三条二坊 (1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告 VII
内裏北外郭の調査 (1976)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I (1976)
 第28冊 研究論集 III (1976)
 第29冊 木曾奈良井一町並調査報告— (1976)
 第30冊 五條一町並調査の記録— (1977)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II (1978)
 第32冊 研究論集 IV (1978)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 (1978)
 第34冊 平城宮発掘調査報告 IX
 宮城門・大垣の調査 (1978)
 第35冊 研究論集 V (1979)
 第36冊 平城宮整備調査報告 I (1979)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III (1980)
 第38冊 研究論集 VI (1980)
 第39冊 平城宮発掘調査報告 X
古墳時代 I (1981)
 第40冊 平城宮発掘調査報告 XI
第一次大極殿地域の調査 (1982)
 第41冊 研究論集 VII (1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告 XII
馬寮地域の調査 (1985)
 第43冊 日本における近世民家 (農家) の系統的発展 (1985)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 (1986)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告 (1987)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書 (1989)
 第47冊 研究論集 VIII (1989)
 第48冊 年輪に歴史を読む
—日本における古年輪学の成立— (1990)
 第49冊 研究論集 IX (1991)
 第50冊 平城宮発掘調査報告書 XIII
内裏の調査 II (1991)
 第51冊 平城宮発掘調査報告書 XIV
平城宮第二次大極殿院の調査 (1993)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書 (1993)
 第53冊 平城宮朱雀門の復元的研究 (1994)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊
—長屋王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告 (1995)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV
—飛鳥水落遺跡の調査— (1995)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告 (1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡 (1999)
 第58冊 研究論集 X (1999)
 第59冊 中世瓦の研究 (2000)
 第60冊 研究論集 XI (1999)
 第61冊 研究論集 XII (2001)
 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告 (2001)
 第63冊 山田寺発掘調査報告 本文編
図版編 (2002)
 第64冊 研究論集 XIII (2002)
 第65冊 文化財論叢 III 奈良文化財研究所
創立五十周年記念論文集 (2002)

- 第66冊 研究論集XV (2003)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編 [法華寺南遺跡] (2003)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査 (2003)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査 (2003)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査 (2005)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告 I (2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告 I
石のカタ古墳・音乗谷古墳の調査 (2005)
- 第73冊 タニ窯跡 A6号窯跡発掘調査報告書 (2005)
- 第74冊 古代庭園研究 I (2006)
- 第75冊 研究論集 XV (2006)
- 第76冊 法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告 (2007)
- 第77冊 日韓文化財論集 I (2008)
- 第78冊 近世瓦の研究 (2008)
- 第79冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 I
基壇・礎石 (2009)
- 第80冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 IV
瓦・屋根 (2009)
- 第81冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 II
木部 (2010)
- 第82冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 III
彩色・金具 (2010)
- 第83冊 研究論集16 (2010)
- 第84冊 平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査 2 本文編/図版編 (2011)
- 第85冊 漢長安城桂宮 報告編・論考編 (2011)
- 第86冊 研究論集17
平安時代庭園の研究—古代庭園研究 II— (2011)
- 第87冊 日韓文化財論集 II (2011)
- 第88冊 西トップ遺跡調査報告
—アンコール文化遺産保護共同研究報告書— (2011)
- 第89冊 四万十川流域 文化的景観研究 (2011)
- 第90冊 Western Prasat Top Site Survey Report
on Joint Research for the Protection of the
Angkor Historic Site (2012)
- 第91冊 遼寧省朝陽地区隋唐墓の整理と研究 (2012)
- 第92冊 文化財論叢 IV 奈良文化財研究所 創立六十
周年記念論文集 (2012)
- 第93冊 奈良山発掘調査報告 II—歌姫西須恵器窯の調
査— (2014)
- 第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 V—藤原京左京六
条三坊の調査— (2017)
- 第95冊 日韓文化財論集 III (2015)
- 第96冊 中世庭園の研究—鎌倉・室町時代— (2015)

奈良文化財研究所 史料

- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集 (複製) (1955)
- 第2冊 西大寺叡尊伝記集成 (1956)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編 I (1964)
- 第4冊 俊乗房重源伝記集成 (1965)
- 第5冊 平城宮木簡一 図版 (1966)
解説 (1969)
(平城宮発掘調査報告 V)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編 2 (1968)
- 第7冊 唐招提寺史料 I (1971)
- 第8冊 平城宮木簡二 図版 (1975) 解説 (1975)
(平城宮発掘調査報告 VIII)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録 I (1975)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録 II (1976)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録 III (1977)
- 第12冊 藤原宮木簡一 図版・解説 (1978)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録 IV (1978)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録 V (1979)
- 第15冊 東大寺文書目録第 1 卷 (1979)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録 VI (1979)
- 第17冊 平城宮木簡三 (1981)
- 第18冊 藤原宮木簡二 (1981)
- 第19冊 東大寺文書目録第 2 卷 (1981)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録 VII (1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第 1 卷 (1981)
- 第22冊 七大寺巡礼私記 (1982)
- 第23冊 東大寺文書目録第 4 卷 (1982)
- 第24冊 東大寺文書目録第 5 卷 (1983)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成 I (1983)
- 第26冊 東大寺文書目録第 6 卷 (1984)
- 第27冊 木器集成図録—近畿古代編— (1985)
- 第28冊 平城宮木簡四 (1986)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第 1 卷 (1986)
- 第30冊 山内清男考古資料 1 (1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成 II (1988)
- 第32冊 山内清男考古資料 2 (1989)
- 第33冊 山内清男考古資料 3 (1992)
- 第34冊 山内清男考古資料 4 (1992)
- 第35冊 山内清男考古資料 5 (1992)
- 第36冊 木器集成図録—近畿原始編— (1993)

- 第37冊 梵鐘実測図集成（上）（1993）
 第38冊 梵鐘実測図集成（下）（1993）
 第39冊 山内清男考古資料6（1993）
 第40冊 山田寺出土建築部材集成（1995）
 第41冊 平城京木簡一（1995）
 第42冊 平城宮木簡五（1996）
 第43冊 山内清男考古資料7（1996）
 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻（1996）
 第45冊 北浦定政関係資料（1997）
 第46冊 山内清男考古資料8（1997）
 第47冊 北魏洛陽永寧寺（1998）
 第48冊 発掘庭園資料（1998）
 第49冊 山内清男考古資料9（1998）
 第50冊 山内清男考古資料10（1999）
 第51冊 山内清男考古資料11（2000）
 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法（2000）
 第53冊 平城京木簡二 長屋王家木簡二（2001）
 第54冊 山内清男考古資料12（2000）
 第55冊 法隆寺古絵図集（2001）
 第56冊 法隆寺考古資料（2002）
 第57冊 日中古代都城図録（2002）
 第58冊 山内清男考古資料13（2002）
 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2003）
 第60冊 平城京条坊総合地図（2003）
 第61冊 鞏義黄冶唐三彩（2003）
 第62冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉一（2003）
 第63冊 平城宮木簡六（2004）
 第64冊 平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2004）
 第65冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉二（2004）
 第66冊 山内清男考古資料14（2004）
 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻（2004）
 第68冊 古代東アジアの金属製容器Ⅰ 中国編（2004）
 第69冊 平城京漆紙文書（一）（2004）
 第70冊 山内清男考古資料15（2005）
 第71冊 古代東アジアの金属製容器Ⅱ 朝鮮・日本編
 （2005）
 第72冊 畿内産土師器集成西日本編（2005）
 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見（2006）
 第74冊 山内清男考古資料16（2006）
 第75冊 平城京木簡三 二条大路木簡Ⅰ（2006）
 第76冊 評制下荷札木簡集成（2006）
 第77冊 平城京出土陶硯集成Ⅰ（2006）
 第78冊 黒草紙・新黒双紙（2007）
 第79冊 飛鳥藤原京木簡一 図版・解説（2007）

- 第80冊 平城京出土陶硯集成Ⅱ 平城京・寺院（2007）
 第81冊 高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
 第82冊 飛鳥藤原京木簡二 図版・解説（2009）
 第83冊 興福寺典籍文書目録（2009）
 第84冊 山内清男考古資料17（2009）
 第85冊 平城宮木簡七 図版・解説（2010）
 第86冊 キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2011）
 第87冊 明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
 第88冊 藤原宮木簡三 図版・解説（2012）
 第89冊 仁和寺史料 古文書編一（2013）
 第90冊 大宮家文書調査報告書（2014）

奈良文化財研究所 研究報告

- 第1冊 文化的景観研究集会（第1回）報告書（2009）
 第2冊 河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要（2010）
 第3冊 古代東アジアの造瓦技術（2010）
 第4冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編／資料編（2010）
 第5冊 文化的景観研究集会（第2回）報告書（2010）
 第6冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」（2011）
 第7冊 文化的景観研究集会（第3回）報告書（2011）
 第8冊 鞏義白河窯の考古新発見（2011）
 第9冊 古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編／資料編（2012）
 第10冊 文化的景観研究集会（第4回）報告書（2012）
 第11冊 河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査（2012）
 第12冊 奈良文化財研究所研究報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」（2013）
 第13冊 文化的景観研究集会（第5回）報告書（2013）
 第14冊 古代官衙・集落研究会研究報告書「長舎と官衙の建物配置」報告編／資料編（2014）
 第15冊 第18回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器Ⅰ（2015）
 第16冊 キトラ古墳天文図 星座写真資料（2015）
 第17冊 藤原宮跡出土馬の研究（2015）
 第18冊 『官衙・集落と土器Ⅱ』第19回古代官衙・集落研究会報告書（2016）

奈良文化財研究所 基準資料

- 第1冊 瓦編Ⅰ 解説（1974）
 第2冊 瓦編Ⅱ 解説（1975）
 第3冊 瓦編Ⅲ 解説（1976）
 第4冊 瓦編Ⅳ 解説（1977）
 第5冊 瓦編Ⅴ 解説（1977）
 第6冊 瓦編Ⅵ 解説（1979）

- 第7冊 瓦編7 解説 (1980)
 第8冊 瓦編8 解説 (1981)
 第9冊 瓦編9 解説 (1984)

飛鳥資料館 図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 (1976)
 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文編 (1977)
 第3冊 日本古代の墓誌 (1977)
 第4冊 日本古代の墓誌 銘文編 (1978)
 第5冊 古代の誕生仏 (1978)
 第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺— (1979)
 第7冊 日本古代の鴟尾 (1980)
 第8冊 山田寺展 (1981)
 第9冊 高松塚拾年 (1982)
 第10冊 渡来人の寺—松隈寺と坂田寺— (1983)
 第11冊 飛鳥の水時計 (1983)
 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで— (1984)
 第13冊 藤原—半世紀にわたる調査と研究— (1984)
 第14冊 日本と韓国の塑像 (1985)
 第15冊 飛鳥寺 (1985)
 第16冊 飛鳥の石造物 (1986)
 第17冊 萬葉乃衣食住 (1987)
 第18冊 壬申の乱 (1987)
 第19冊 古墳を科学する (1988)
 第20冊 聖徳太子の世界 (1988)
 第21冊 仏舎利埋納 (1989)
 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天 (1989)
 第23冊 日本書紀を掘る (1990)
 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察 (1991)
 第25冊 飛鳥の源流 (1991)
 第26冊 飛鳥の工房 (1992)
 第27冊 古代の形 (1995)
 第28冊 蘇我三代 (1995)
 第29冊 齊明紀 (1996)
 第30冊 遺跡を測る (1997)
 第31冊 それからの飛鳥 (1998)
 第32冊 UTAMAKURA (1998)
 第33冊 幻のおおでら—百濟大寺 (1998)
 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として (1999)
 第35冊 あすかの石造物 (2000)
 第36冊 飛鳥池遺跡 (2000)
 第37冊 遺跡を探る (2001)
 第38冊 ‘あすか—以前’ (2002)
 第39冊 A0の記憶 (2002)
 第40冊 古年輪 (2003)
 第41冊 飛鳥の湯屋 (2004)

- 第42冊 古代の梵鐘 (2004)
 第43冊 飛鳥の奥津城—キトラ・カラト・マルコ・高松塚 (2005)
 第44冊 東アジアの古代苑池 (2005)
 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち (2006)
 第46冊 キトラ古墳壁画四神玄武 (2007)
 第47冊 奇偉莊嚴山田寺 (2007)
 第48冊 キトラ古墳壁画十二支—子・丑・寅— (2008)
 第49冊 まぼろしの唐代精華—黄冶唐三彩窯の考古新発見— (2008)
 第50冊 キトラ古墳壁画四神—青龍白虎— (2009)
 第51冊 三燕文化の考古新発見—北方騎馬民族のかがやき— (2009)
 第52冊 キトラ古墳壁画四神 (2010)
 第53冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
 第54冊 星々と日月の考古学 (2011)
 第55冊 飛鳥遺珍—のこされた至宝たち— (2011)
 第56冊 比羅夫がゆく—飛鳥時代の武器・武具・いくさ— (2012)
 第57冊 花開く都城文化 (2012)
 第58冊 飛鳥寺2013 (2013)
 第59冊 飛鳥・藤原京への道 (2013)
 第60冊 いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代— (2014)
 第61冊 はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶— (2014)
 第62冊 はじまりの御仏たち (2015)
 第63冊 キトラ古墳と天の科学 (2015)
 第64冊 『文化財を撮る—写真が遺す歴史』
 第65冊 『祈りをこめた小塔』
 第66冊 『早川和子が描く飛鳥むかしむかし』

飛鳥資料館 カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道 (1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1—最近の出土品 (1975)
 第3冊 飛鳥の仏像 (1978)
 第4冊 桜井の仏像 (1979)
 第5冊 高取の仏像 (1980)
 第6冊 檀原の仏像 (1981)
 第7冊 飛鳥の王陵 (1982)
 第8冊 大官大寺—飛鳥最大の寺— (1985)
 第9冊 高松塚の新研究 (1992)
 第10冊 飛鳥の—と—最近の調査から— (1994)
 第11冊 山田寺 (1996)
 第12冊 山田寺東回廊再現 (1997)

- 第13冊 飛鳥のイメージ (2001)
 第14冊 古墳を飾る (2005)
 第15冊 うずもれた古文書 —みやこの漆紙文書の世界— (2006)
 第16冊 飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相 (2006)
 第17冊 飛鳥の考古学2006 (2007)
 第18冊 「とき」を撮す—発掘調査と写真— (2007)
 第19冊 飛鳥の考古学2007 (2008)
 第20冊 飛鳥の考古学2008 (2009)
 第21冊 飛鳥の考古学2009 (2010)
 第22冊 小さな石器の大きな物語 (2010)
 第24冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
 第24冊 飛鳥の考古学2010 (2011)
 第25冊 鑄造技術の考古学—東アジアにひろがる鑄物師のわざ— (2011)
 第26冊 飛鳥の考古学2011 (2012)
 第27冊 飛鳥の考古学2012 (2013)
 第28冊 飛鳥・藤原京を考古科学する (2013)
 第29冊 キトラ古墳壁画発見30周年記念 白虎 玄武 朱雀 青龍 (2014)
 第30冊 飛鳥の考古学2013 (2014)
 第31冊 大和の美仏に魅せられて (2014)
 第32冊 飛鳥の考古学2014 (2014)
 第33冊 飛鳥の考古学2015 (2015)

その他の刊行物 (2016年度)

- ・奈良文化財研究所紀要2016
- ・奈文研ニュースNo.61～64
- ・埋蔵文化財ニュースNo.166～169
- ・『ナント!おいしい!?!平城京!!』平城宮跡資料館企画展リーフレット
- ・『地下の正倉院展 式部省木簡の世界』平城宮跡資

- 料館特別展リーフレット
- ・『発掘速報展平城2016』平城宮跡資料館企画展リーフレット
- ・『寺院関連金属製品の調査』飛鳥資料館研究図録第20冊
- ・『仁和寺史料 目録編〔稿〕三 仁和寺御経蔵聖教目録稿三 第五十一函～第七十六函』
- ・『若桜町若桜—伝統的建造物群保存対策調査報告書一』
- ・『鞏義黄冶窯』河南省文物考古研究院・中国文化遺産研究院・奈良文化財研究所
- ・『デジタルコンテンツを用いた遺跡の活用』平成27年度遺跡整備・活用研究集会報告書
- ・『織豊期～江戸時代初期の庭園』
- ・『郡庁域の空間構成』第20回古代官衙・集落研究会 研究報告資料』
- ・『政庁域(郡庁・国庁・宮殿他)遺構集成』(第一分冊 図版編、第二分冊 表編)
- ・『古代瓦研究Ⅶ —平城宮式軒瓦の展開 1 6225—6663系— —平城宮式軒瓦の展開 2 6282—6721系—』
- ・『営みの基盤—生態学からの文化的景観再考—(第7回文化的景観研究集会報告書)』文化的景観スタディーズ02
- ・『川と暮らしの距離感 四万十・岐阜』文化的景観スタディーズ03
- ・『地中レーダーを応用した遺跡探査 GPRの原理と利用』
- ・『西トップ遺跡調査修復報告書 北祠堂編1』
- ・『ヴィエルスバイ窯跡調査報告書』
- ・『飛鳥むかしむかし 飛鳥誕生編』
- ・『飛鳥むかしむかし 国づくり編』
- ・『平城京のごみ図鑑』

人事異動 (2016. 4. 1~2017. 3. 31)

●2016年4月1日付け

副所長 杉 山 洋
 研究支援推進部研究支援課長 伴 佳 英
 研究支援推進部総務課課長補佐 東 部 浩 志
 (兼) 研究支援推進部総務課財務係長
 研究支援推進部研究支援課専門職員 西 田 功
 企画調整部写真室専門職員 中 村 一 郎
 研究支援推進部連携推進課経営戦略係長 高 田 幸 恵
 研究支援推進部連携推進課経営戦略係主任 濱 名 梓
 京都国立博物館総務課事業推進係主任 三本松 俊 徳
 研究支援推進部総務課総務係 真 嶋 明 奈
 研究支援推進部研究支援課宮跡等活用支援係 今 西 康 益
 企画調整部長 森 本 晋
 (兼) 企画調整部国際遺跡研究室長
 (兼) 企画調整部写真室長
 埋蔵文化財センター長 小 池 伸 彦
 (兼) 埋蔵文化財センター環境考古学研究室長
 (兼) 埋蔵文化財センター年代学研究室長
 埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長 金 田 明 大
 都城発掘調査部(平城)考古第一研究室主任研究員 国 武 貞 克
 企画調整部主任研究員 中 川 あ や
 都城発掘調査部(平城)主任研究員 丹 羽 崇 史
 都城発掘調査部(藤原)主任研究員 大 林 潤
 埋蔵文化財センター主任研究員 脇 谷 草 一 郎
 都城発掘調査部(平城)考古第二研究室研究員 山 藤 正 敏
 (兼) 企画調整部国際遺跡研究室
 都城発掘調査部(平城)遺構研究室研究員 番 光
 飛鳥資料館学芸室研究員 西 田 紀 子
 (兼) 企画調整部展示企画室
 飛鳥資料館学芸室研究員 若 杉 智 宏
 (兼) 企画調整部展示企画室
 (兼) 研究支援推進部連携推進課文化財情報係 高 田 祐 一
 埋蔵文化財センター保存修復科学研究室
 アソシエイトフェロー 松 田 和 貴

●2016年5月1日付け

文化遺産部景観研究室アソシエイトフェロー 本 間 智 希

●2016年6月1日付け

埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室
 アソシエイトフェロー 山 口 欧 志

●2016年7月1日付け

都城発掘調査部(平城)主任研究員 岩 戸 晶 子
 奈良国立博物館学芸部教育室主任研究員 中 川 あ や
 埋蔵文化財センター保存科学研究室研究員 柳 田 明 進

企画調整部国際遺跡研究室専門職 佐 藤 由 似
 企画調整部展示企画室アソシエイトフェロー 三 輪 仁 美

企画調整部展示企画室アソシエイトフェロー 田 中 恵 美
 埋蔵文化財センター保存科学研究室
 アソシエイトフェロー 金 旻 貞

飛鳥資料館アソシエイトフェロー 菊 地 智 慧

●2016年8月1日付け
 文化遺産部遺跡整備研究室アソシエイトフェロー マレス・エマニュエル

●2016年9月30日付け
 辞 職 金 宇 大

●2016年11月1日付け
 都城発掘調査部(藤原)考古第二研究室
 アソシエイトフェロー 張 祐 榮

●2017年3月31日付け
 定年退職 杉 山 洋
 定年退職 林 良 彦
 定年退職 小 池 伸 彦
 任期満了退職 三 輪 仁 美
 任期満了退職 大 谷 育 恵
 任期満了退職 井 上 幸
 辞 職(転出) 桑 原 隆 佳
 辞 職(転出) 水 田 康 介
 辞 職(転出) 番 光
 辞 職 跡 見 洋 祐

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2016年度	2017年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	786,606	804,823
施設整備費	29,514	1,346,769
自己収入（入場料等）	49,155	49,155
計	865,275	2,200,747

土地と建物

単位：㎡

	土地	建物（建面積/延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	現在、建替中	
平城宮跡資料館地区	※	13,328.49/21,394.61	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2017年4月7日現在）

単位：千円

研究種目	2016年度				（参考）2017年度			
	①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金		①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
基盤研究（S）	1	39,780	—	—	1	33,670	—	—
基盤研究（A）	4	27,170	—	—	2	13,000	—	—
基盤研究（B）	7	17,420	5（5）	4,160	7	20,410	4（4）	3,250
基盤研究（C）	—	—	12	15,340	—	—	17	19,370
挑戦的萌芽研究	—	—	3	3,250	—	—	2	1,950
若手研究（A）	5	13,780	2（2）	4,290	5	18,460	1（1）	—
若手研究（B）	—	—	21	19,262	—	—	22	19,110
奨励研究	1	700	—	—	—	—	—	—
新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究	—	—	—	—	1	2,470	—	—
研究成果公開促進費（データベース）	1	3,300	—	—	1	4,000	—	—
国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）	—	—	1	13,910	—	—	—	—

※同一の研究課題で①と②の両方が交付されるもの（一部基金分）の件数はそれぞれに含み、②の括弧書きは共通するもの内数である。

※延長分含む

受託調査研究

単位：千円

区分	2015年度		2016年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	22	155,218	25	203,571
発掘	11	71,090	16	142,077
計	33	226,308	41	345,648

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2015年度		2016年度	
	件数	金額	件数	金額
	6	4,350	10	7,280

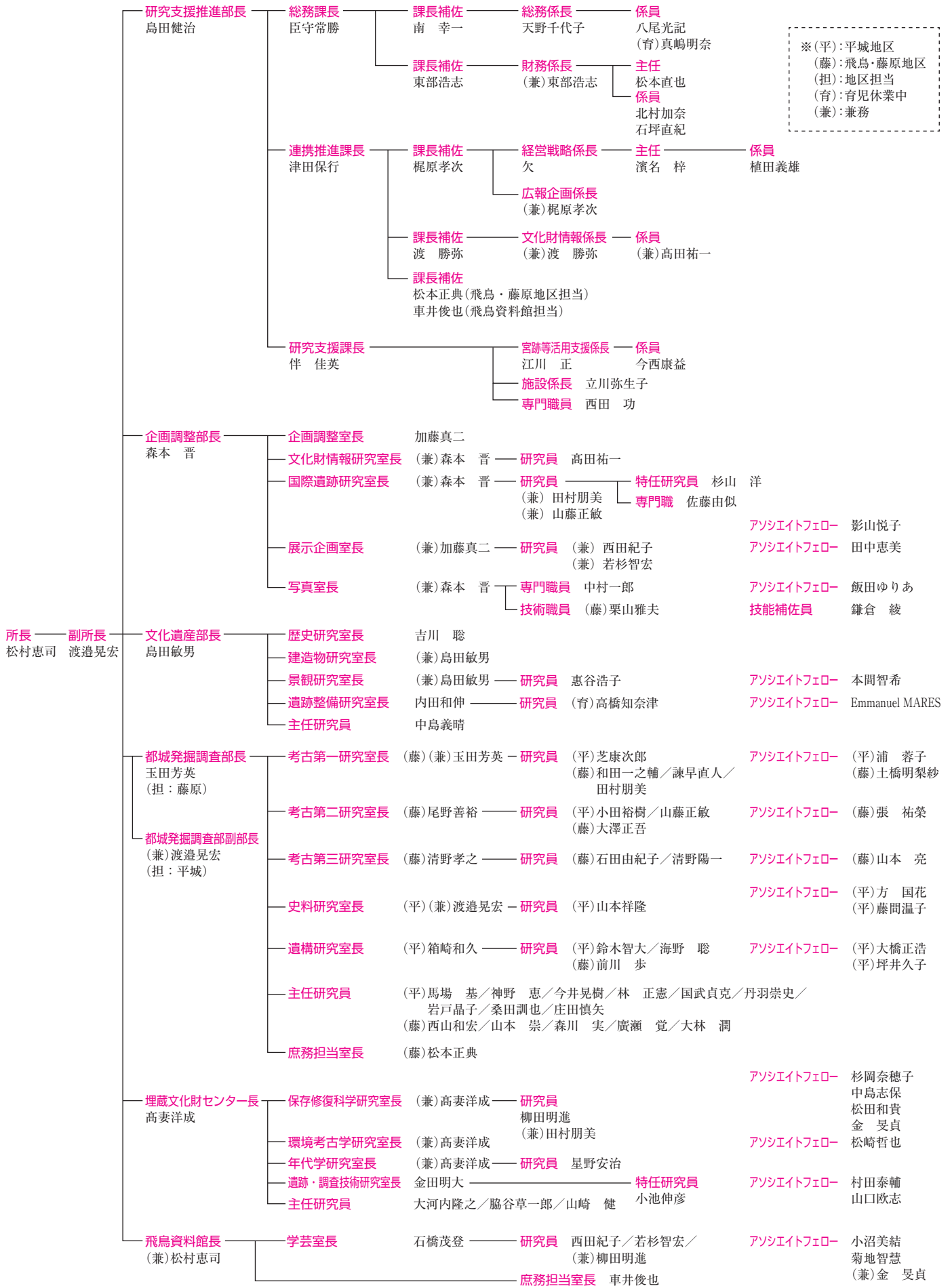
※採択年による集計

※二ヵ年にわたる場合は初年度に計上

2017年4月1日現在

職員一覧

※(平):平城地区
(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(育):育児休業中
(兼):兼務



客員研究員一覧

2017年4月1日現在

平成29年度客員研究員名簿

所 属	氏 名
研究支援推進部	水 野 裕 史
研究支援推進部	渡 辺 伸 行
企画調整部 (企画調整室)	羽 生 淳 子
企画調整部 (文化財情報研究室)	小 林 謙 一
文化遺産部 (歴史研究室)	綾 村 宏
文化遺産部 (歴史研究室)	山 田 徹
文化遺産部 (建造物研究室)	林 良 彦
文化遺産部 (建造物研究室)	福 嶋 啓 人
文化遺産部 (建造物研究室)	李 暉
文化遺産部 (景観研究室)	小 浦 久 子
文化遺産部 (景観研究室)	清 水 重 敦
文化遺産部 (景観研究室)	山 口 敬 太
文化遺産部 (遺跡整備研究室)	EDWARDS Walter Drew
文化遺産部 (遺跡整備研究室)	小 野 健 吉
都城発掘調査部 (考古第二研究室)	青 木 敬
都城発掘調査部 (考古第三研究室)	中 川 二 美
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	黒 田 洋 子
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	杉 本 一 樹
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	館 野 和 己
都城発掘調査部 (平城・遺構研究室)	窪 寺 茂
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	上 原 眞 人
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	黒 羽 亮 太
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	巽 淳一郎
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	深 澤 芳 樹
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	青 木 政 幸
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	大 賀 克 彦
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	小 椋 大 輔
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	北 田 正 弘
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	肥 塚 隆 保
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	佐 藤 昌 憲
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	澤 田 正 昭
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	辻 本 與志一
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	難 波 洋 三
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	浜 田 拓 志
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	福 永 香
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	上 中 央 子
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	大 江 文 雄
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	菊 地 大 樹
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	茂 原 信 生
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	中 橋 孝 博
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	丸 山 真 史
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	伊 東 隆 夫
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	児 島 大 輔
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	藤 井 裕 之
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	光 谷 拓 実
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	小 澤 毅
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	狭 川 真 一
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	中 村 亜希子
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	西 口 和 彦
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	西 村 康
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	野 口 淳
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	山 中 敏 史